
零崎行識の人間旅行

プラネット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

零崎行識の人間旅行

【Nコード】

N1874S

【作者名】

プラネット

【あらすじ】

殺し名序列第三位『零崎一賊』。二十年後の一賊の若き長、零崎行識（こしじき）は一賊の完全壊滅を目論む者達との戦いに巻き込まれる。歴史改変を賭け、一賊存亡を賭けた物語が幕を開ける。

序章（前書き）

作者初の零崎小説です。

細々とゆっくり更新していきますので応援よろしく願います。

序章

それはとあるどこかの街だった。

前触れなど何一つ微塵に起こす事も無く——彼らは対面した。

正々堂々と。正面と。堂々と。公明正大に。逃げも隠れもせず——
彼らは向き合う。

片方は顔面に刺青のある男、方やもう片方は童顔といういかにも
変わった対面を彼らは果たしていた。

やがて刺青の男が口を開く。

「かはは。……お前、何者だよ？」

「……………」

童顔の人物は答えない。ただ、微笑んでいるだけだ。

その余裕が刺青の人物からすればどこか嫌なのだ。

「殺し名だよな？」

「ええ、殺し名です」

童顔の人物は隠すこともしなければ、一切否定などもせず首を
うん、と縦に頷かせた。

「俺を殺しに来たんだろ？ だったらかかって来な。殺して解はらして
並べて揃えて晒してやんよ」

「お言葉は有り難いですが——遠慮しておきます、零崎人識せいき ひとしきさん」

「変わりすぎだろ」

「はい、僕はとっても変わっています」

人識——そう呼ばれた刺青の男は戦う姿勢を解いた。理由は聞かなくても分かる。童顔の人物には自分を殺すつもりが一切無いのだという事が理解できるのである。

そして、童顔の人物は続けてこう言った。

「では僕も自己紹介を。僕の名前は零崎行識^{ぜろさきこうしき}。人識さん、あなたと同じ——零崎ですよ」

人識は行識の発言が信じられなかった。

零崎——殺し名序列第三位、殺人鬼集団《零崎一賊》。

それが零崎なのであるが、それ以上に重要なのは今現在、零崎一賊が全滅しているという事だ。

ほんの少し前——人識は大厄島に行った。それ以前に彼はある人物と共に人類最強を倒しに向かった——のではあったが。それ以上のことは正直思い出さたくない。

あれは屈辱そのものだ。いや、屈辱と呼んでいいものなのだろうか。

とにかく、零崎一賊を全滅させた張本人は橙色の髪を持つ——^{おもかげまじころ}なる種、想影真心。真心の手により、零崎一賊は全滅した。人識は今では珍しい零崎の生き残りだ。

いや、零崎はまだもう1人いる。それは無桐伊織^{むとういおり}という人物だ。またの名を零崎舞織^{ぜろさきまいおり}。

今や零崎一賊は人識と伊織の二人だけ。だというのにも関わらず、目の前にいる人物は零崎性を名乗っているのだ。

行識と名乗った人物は人識より若干背丈が高かった。髪の毛はボ

サバサの茶髪。黒のタートルネックを巻いた上で更に学ランを開いた上で着用なさっている。その下には灰色のトレーナー。そしてダボダボの黒ズボン。靴はどこにでもありそうなスニーカーだった。しかし、この人物は——終始笑顔を絶やさない。それが人識にとってはある意味で不気味に感じるところだ。

人識は——口を開いた。閉じきった重い口を開く。

「零崎一賊か？」

「はい」

「……………一賊の生き残りなのか？ いや、一賊は俺と伊織ちゃんを残して全滅したはずだし……………」

その時だった。

『行識。お前さんがもたもたしておるうから、人識が困ってしまつてではないか』

「ちょ、零！ 何勝手に出てきてるのさ……………！」

「……………へ？」

人識の目の前に突如として現れたモノを一言で言うならば——それは幽霊だ。

幽霊はいかにも武士の姿をしていた。青の袴を身に着け、どこにでもいそうな侍のような姿をしている。ただ、見た目はかなり老いている。お年寄りなのだろう。しかし——

ますますワケが分からなくなってきた。幽霊と喋る、なんて事をする零崎は聞いた事が何一つとしてない。第一、そんなプレイヤーがいたら別の意味で名が知れ渡る事は確実なはずだ。

「零、勝手に出てくるなってあれ程言つたじゃないか」

『知らない、お前さんがもたもたしておるのが悪い。第一、見てみ

い。人識も理解不能な顔をしておる』

「それは間違いなく零、君のせいだよ……」

『何？ ワシの責任とでも言うのか？ お前さん、いつからそこまで付け上がりおった』

「付け上がってないって！ 零の勘違い振りは相変わらず酷いよ……」

……」

『まあいい機会じゃ。ほれ、とつと言つてしまえ行識』

「……まあいつか。で、では改めて零崎人識さん」

「何だよ」

「僕が何者なのか——お話しましょう」

続くように行識はとんでもない事を口にする。それこそ、物理的には有り得ないような事を、彼は口にするのだ。

「僕は未来から来ました。今より二十年後の世界から」

「………は？」

「僕は二十年後に存在する零崎一賊——そして同時に一賊の長です」

「つ、つまり……要するにお前、時を越えて来たってわけか？」

「その通りです」

「信じられねえ……」

『お前さん、しかし有り得ないと言い切れんぞ。ドラえもんとて二十二世紀から来ておる。ワシ達が未来から来ないという保証はどこにもあるまいよ』

「あれは百年先だから信じられるんだよ！ ていうか二十年そこらでタイムマシンが出来るか！」

——と、人識は反論こそしたものの、現実を見る限り、彼らがタイムマシンのような物やそれに近い物を使っていることは明白である。

「まあ、そんな事はどうでもいいんです」

「どうでもいい？」

「これをどうぞ」

その言葉と共に行識が人識に投げ渡したモノ——それは一つのナイフ。
ナイフの扱いに長ける人識がキャッチでミスをするはずがなく、

人識はそれをしっかりと掴んだ。

「傑作だぜ。お前、殺ろうつてのか？」

「ええ、構いません。でも、勝負は戦闘不能まで。不殺で宜しいですか？」

「……構わねえ。『最強』との約束もある事だしな」

刹那、空気が一変した。

人識は同時に理解する事となる。コイツもやはり、本物のプレイヤーであり——

そして。

彼が《零崎》だという事も。殺気で分かる。衝動を感じ取れるから分かる。

そして、彼は——行識は名乗る。

「僕の名は超越者、プロフェーク零崎行識。あなたの未来を破壊する」

「カハハ、傑作だぜ！ かかって来いよ未来の零崎——殺して解はらして並べて揃えて晒してやんよ！」

画して——未来から来た、と名乗る零崎こと零崎行識と零崎の鬼子、零崎人識は激突する。

そして、こことは一切違う別の場所でも――。

「あなた誰なんですかあ？」

「私ですか？ 私はあなたと同じ零崎です。とは言っても、未来から来たんですけどね」

「わお！ こいつは驚きです！！ ていうか未来から来たのってホントのホントなんですか！？」

「ホントのホントです」

「ホントのホントのホントに！？」

「ホントのホントのホントに…… ってこれじゃ埒が明かないでしょう。舞織さん」

零崎舞織――否、無桐伊織の前に佇む一人の女性。

その女性は背丈の面でいけば、伊織に引けを取らないほどである。両腕にピンクのリボンを巻きつけ、更に黒の燕尾服のようなものを身に着けている。ピンクのショートスカートに首元には大きなピンクのリボンを蝶ネクタイのように装備。

髪の毛は長く、青色だ。そしてその髪の毛の上に赤のカチューシャ。目の色は黄色と橙色を混ぜ合わせたような色合いである。

「そうですねえ。で、誰なんですか？ アナタは」

「私は零崎高織。ぜろさきたかあり――試させてもらいますよ伊織さん」

「試す？ わたしをですか？」

「ええ、もし勝てたら零崎人識さんの所へご案内します」

「わお！ 人識君のいる場所へ連れて行ってくれるんですか！？」

高織、と名乗る女性は首を縦に振る。それは了承の証。

そして、高織は口元を軽く歪めるかのように尖らせる。

「まあ、私も柔じゃありません。今の伊織さんと……どっちが強いのか……気になるだけですから」

「は？」

「いえ、何でもありませんよ。では始めましょうか」

そう言うと、自身の服の中――胸の燕尾服に手をいれ、茨のついたまるでどこぞの女王様が使つかのような鞭を取り出す。

そして、伊織もまた『マインドレンデル自殺志願』から受け継いだ大鋏を取り出し、口に銜えた。

伊織は言った。

「それでは、零崎を開始します」

答えるように高織も言う。

「では、零崎を発生させます」

それが両者激突の合図となる――！

どこか。

場所など分らない。

場所が分かれば大問題。

世界のどこか。どこでもないどこか。

彼らはそこに潜んでいた。

逃げるように？

隠れるように？

好機を見出すために？

否、その全てが違い——また全てが正しい。

ただ、変わらない現実。それは——

彼らがいかなる言葉を使って説明いいわけしようともそこに彼らはいる、
という事だ。

「で——やはり、連中も追いかけてきた——か」

「ええ。面倒なことこの上無いわ。アンタのバカのような癖が仇になつたのよ」

「いいじゃないか。どうせバレるのは時間の問題だ——なら、始めから晒した方がいい。違うか？」

「違わなくはないわ。でもそこはやはり、成功率の高い方を求めるべきよ」

「そうか？ 零崎一賊をかつて滅ぼした橙々なる種は——別にそういう事を気にしなかったらしいじゃないか」

「あれはあれ。橙々なる種の実力値が異常だっただけよ。私達は仮にも生身の人間——普通の肉体をしている。どう考えたってアンタも橙々なる種に勝てるなんて——まず思わないでしょ？」

「そうだな。だからこそ、俺は手に入れたわけじゃないか」

「そうだけどね……」

「まあいいさ。連中を泳がすのもいい。ただ、最後に——最後に勝つのは俺達だ」

この物語は謎解きなど無い。

この物語はバトルくらいしかない。

この物語は零崎一賊を巡る物語だ。

そして、後の人々はこの騒動をこう呼んだ——『零崎行識の人間旅行』と。

序章（後書き）

本作は色々と試行錯誤も重ねつつ書き上げていくので色々と修正箇所があるかもしれません。

もし気になる点を見つけれたら感想なりいただけると有り難いです。

それではまた次回。

第壹日目 零崎行識VS零崎人識（前書き）

今回は行識と人識の対決です。

といっても、初の戦闘シーンなので今回は割合控えめにしております。

そこはご了承下さい。

恐らく次の戦闘辺りから激しさを増す事になると思いますので。

第壹日目 零崎行識VS零崎人識

殺し名には一般的に拳銃といった飛び道具は通用しない。

理由は単純明快で、拳銃の引き金を引く速度と拳の届く速度、どちらが速いか——答えは単純で後者が多いはずだ。

そして、殺し名の半数以上のプレイヤーが後者の位置づけにある以上、飛び道具を使おうともそれを避ける術の一つ二つ、所持しているはずである。

だというのにも関わらず——零崎行識の使う武器は恐ろしく、そして同時に理解の範疇を超えていた。

未来の零崎の長、零崎行識と現存する零崎が一人にして、零崎の鬼子、零崎人識の一戦はとても一方的だった。

いや——一方的ではない。正しく言うなれば、決着は事実上既に着いていた。

たった、二回の攻撃で。

「……………有り得ねえだろこれは」

「有り得ないも何も、これが現実です」

人識の言葉に行識は平然と述べる。人識の手に握られるはナイフ、そして行識の手に握られる得物——それは拳銃だった。どこにでもありそうな全身を黒で塗りたくった拳銃。

「いくらなんでも無茶苦茶だろ teme e……俺の行動全てを見透かすかのように銃弾を放ちやがって」
「それが僕の力ですよ人識さん」

行識は一言でそう簡潔に言い切る。

そう、たった二発の銃弾が——たった二回の攻撃が決着を着けたに等しい。

零崎行識は零崎人識を完全に封じ込めた。

それが今の拮抗状態の原因である。双方が動けないのではない。
一方的に——人識を行識は封じ、押さえ、そして——潰している。
生殺与奪の権利を既に行識に全て取られていた。

『何じゃ、もう決着か？ 人識も大した事無いのお』

「じゃあ teme e が戦^やってみやがれ。コイツの強さは尋常じゃねーよ」
『かっかっか。行識の強さはワシもよう知っておる。まあワシはそれ以前に幽霊。銃弾なんぞ効かぬがな。かっかっか！』

「teme e、本^{マジ}気でぶっ潰す！」

マジギレの人識がいた。

幽霊相手にマジギレするのも少々癪な部分もあるだろうが、そこは仕方の無いところがあるだろう。

「零、言いすぎ」

『お前さんはイチイチうるさいのお、行識。良いではないか、高織もおらぬのにワシは退屈じゃ。遊び相手の一つや二つは欲しいわい』
「俺は遊び相手じゃねーよ！！」

しかし、よくよく考えてみれば人識は一度も攻めという攻めを——
攻撃そのものを許されていない。

力の差は——最早歴然である。

「テメエ色々と滅茶苦茶だぜ……」

「滅茶苦茶で結構です。では——」

行識はその言葉と共に駆け出す。駆け出すと同時に彼は銃を学生服の内側へ入れたのだ。

そして左手で銃を入れた場所とは反対側から一つの武器を取り出す。それを人識は見た事があったのだ。

だからこそ人識は衝撃を受ける。それは——彼の認識上、『欠陥製品』が持っていたはずの物だから。

「それは……」

人識の動揺は勿論、行識にも伝わる。動揺を気にしたか、彼もまた立ち止まり、述べる。

「ん？　どうかしましたか？　この刀子。以前拾ったんですよ」

「拾ったってお前……傑作すぎるだろ」

「事實は事實。この武器をご存知なんですか？」

「そいつは『無銘』^{むめい}。欠陥製品が持っていたはずだ」

「欠陥製品……またですか」

「また？」

「いえ、なんでもないです。ふうん……『無銘』か。この刀子にそんな名前があったなんて知りませんでしたよ」

行識は『無銘』をまじまじと見つめながら、その名を脳裏に刻み付ける。

「まあいいです。この《無銘》は今僕のものだ。武器はあるべき主人を選ぶとか、以前どこかの書物で読んだ事があります。《無銘》という名が付けられている以上は、名高い職人が作ったに違いない。そして《無銘》は今、僕という主人を選んだ……それだけですから」「どこの書物だよそりゃ」

「覚えてないです」

「覚えてないのかよ、そこ!？」

『かつつか! 行識の記憶力の悪さは天下一品じゃからのお。かなり悪いぞ? 最悪、昨晚の飯すら忘れておる。ひどい時は数十分前の事も忘れとるの』
「ぜーろお?」

行識の視線に零は完全に目をそらす。幽霊だというのに冷や汗が見えてしまうような錯覚に襲われる人識。

「まあいいです。試合再開といきましょう。長話はまた後で」

「だな。さつさと殺して解ばらして並べて揃えて晒してやりたい」

「では行きます」

「来いよ」

刹那、行識と人識——両者の持つ得物がぶつかり合う。響くは金属音。

両者の攻撃は何一つとして掠りもしない。

両者の攻撃は何一つとして直撃しない。

両者の攻撃は得物同士が交錯するだけだ。

両者の攻撃は——最早戦いと言えるようなレベルではなかった。

人識が攻撃に転じれば、すかさず行識は防御の方へ回り、隙を見つけては両者の攻防は常に逆転していた。
そう——互角なのだ。

ナイフの扱いでは既に超一流の域に達している人識と互角に渡り合うなど——考えられない。

「一体何なんだよテメエは！ 傑作すぎるぜ！！」

「人識さんにそこまで本気で言われると光栄ですよ！ 弟子としても——ねっ！」

「弟子イ！？」

つばぜり合い。そう、つばぜり合いの中——行識は言ったのだ。

“弟子”と。

つまり、それがどういう事なのか——瞬時に人識は理解できたはずなのだ。

傑作すぎるだろ、そりゃ——

「俺は俺自身の手でテメエを育てたつてのか？ そいつぁ傑作だろ！」

「傑作すぎて未恐ろしいと言うはずだ——本人も言っていましたよっ！」

その言葉で行識は一気に押し込む。つばぜり合いの中で彼は一気に攻めに転じたその瞬間である——

『行識、いかん！！』

「え——ッ！？」

零の言葉に行識は人識から目をそらす——

そんな行識の視界に突如として映る一本のナイフ。それは既に眼前に迫っていた。

放った主は勿論、人識ではない。しかし、弾き返すのには動作が百パーセント間に合わない。

「さあ、祭りを始めましょう——零崎一賊」

そこに、何の前触れも無く、いつの間にか、突然と立つ一人の女性。

背丈は人識とほぼ同じ。紫一色のドレスを身に纏った長い黒髪の女だ。瞳は衣服に合わせたのか——否、衣服をそう合わせたのだからか紫色だ。

「わたくしの名前は閻口^{やみぐち}靈衣。主人の命により、参上した次第」

「霊衣を動かしたの？」

「ああ」

「まああの娘なら上手くやれるとは思うけど……よりによってアイツもいるなんて面倒な事この上無いわね」

「まあ……アイツなら上手くやれるだろうが一応警戒はしておくべきだな。かつてのプレイヤー、直木飛緑魔風なめきひえんまに言うならば、“零崎行識は恐ろしく強い可能性”だな」

「過大評価でしょ」

「過大評価じゃない、これくらいは普通だ。特にアイツを初めて見て——戦ったヤツは皆死んでいる。それを忘れたか？」

「忘れないわ。“零崎の覇者”なんて異名——あんまり好きじゃないのよ」

「覇者というのはまあ、“最強”と同じだからな。その意見には同意しよう」

「で？ 霊衣がしくじったら？ 零崎行識は——危険すぎるでしょ。零崎人識だけならまだしもと言え」

「そこは霊衣に任せるさ。俺はアイツの成り行きを見守る事しか出来ん。最悪の場合——俺も行く」

「そうなった場合は——やけに早い出陣って事になるわね」

「霊衣が終わらせてくれる事を信じるしかあるまい。零崎行識の持つ能力——ちから

時に干渉できる力を打破して」

静かにそんな声が響き渡るのであった。

（零崎行識VS零崎人識——強制終了）

第壹日目 零崎行識VS零崎人識（後書き）

今話のテーマ

零崎行識VS零崎人識

ずばりこれです。

タイトル通りですね。

プロットでも最初の対決は彼らにするつもりでした。

そして早速、新キャラの闇口霊衣が登場です。

この名前は突如として降臨した名前でした。

因みに僕は学生なんですが授業中に突然キターツ！！という感じで。

そして、未だに一切の謎が不明な最後を締めくくる会話。

色々伏線は多く張り巡らせておりますので独自の妄想という名の推理で先の展開を予想されては如何でしょうか？

多分楽しくなるんじゃないかと思えます。これは本作のみならず全ての作品に言える事です。

ではまた次回、お会いしましょう。

第貳日目 零崎高織VS無桐伊織

零崎高織と零崎舞織——否、無桐伊織。

両者に共通している点は非常に分かりやすく、簡単だ。それは——数少ない零崎の女性であるという点である。

これをどこぞの《生涯無敗》が聞けば、ある意味でどれほど歓喜するのだろうか想像を絶する。

しかし、もう一つ言える事がある。

それはどちらも——純粋な零崎なのであるという事。

流血の繋がりである零崎一賊。

そんな二人の激突が始まっていた。

「こんなはずじゃないでしょ……！」

零崎高織は逃走していた。

規格外だったのだ。相手が。

無桐伊織——否、零崎舞織は仮にもこの時代に存在する事実上最後の、生粋の零崎と言って過言ではない。

故に、だからこそ——たまりにたまっていた殺人衝動は凄まじい。

大厄島での戦闘で全ての殺人衝動が解消されたのか——答えはN Oだろう。

さらにそれからまた蓄積されたものを考えると大厄島ほどは無くとも、相当な量の殺人衝動を伊織は抑えていた事になる。

「これが……“最後の”零崎の力……ここまで凄まじいなんて！
噂に名高い自殺志願が——噂に聞いていた零崎双識ぜろさきふたしきの探し当てた最後の一人！」

だが、高織は全てにおいて規格外の動きを見せる。
暴走する力——その力を抑え込まないと彼女の対峙する敵とは戦えない。

彼女は打破するしかないのだ。逃走など、零崎の——否、彼女の恥だ。生き恥である。

高織は自らの得物である茨の鞭を構え直し、暴走する伊織と真っ向から向き合う。

「私の刺鞭ローゼンティグが勝つか、伊織さんの『自殺志願』マインドレンデルが勝つか。結果は神のみぞ知る、というところでしょうね」

時間軸を少し戻そう。
といっても、僅か十分程度の遡り。

戦いは高織が優勢だった。いや、圧倒的に有利だった。

高織がどれほどの実力者なのかは分からない。しかし、伊織はまだルーキーなのだ。

そう、ルーキー。

無限の可能性を秘めつつも、一方では実力者に勝つなどまず有り得ない。そんな存在。

しかし、伊織は自らの可能性を自らの手で掴み取ってきた。
それは今回も変わらず。

「……これが伊織さんのこの時代での実力ですか？」

「そーみたいですな。困った事にわたしの実力ではどうやら勝て
そうに無いみたいですな」

「……ですね。では——とりあえず」

死んでももらいましょうか、とごく普通に、常識かのように、淡々と高織は口にする。

「人識さんの遭遇、それはすなわち——一賊の終焉の時なんです。
まあ、アイツの言っていた事ですけど。とにかく、足手まといにな
ると厄介ですし、私は伊織さんをガードする自信は無いです。だっ
て——」

面倒だから、と高織は付け加える。

高織は面倒臭がり屋だ。勿論、ある程度なら面倒を見たがるが、
たまたま伊織はその条件を満たしていない。

まるで少女趣味と呼ばれた零崎曲識（ゼロキマカシキ）が殺人を犯すために満たさせ
る条件——それと似たように。

勿論、色々な意味で一切かみ合ってこそいないが、しかしそれ
でも共通していないからこそ——条件を満たす必要性という部分だけ
でも充分な共通点であろう。

「まあ人識さんに会えずに死ぬというのも本望で無い事は分かって
ます。でも、変わらない現実はあるんですよ。あなたが間もなく死
ぬという、現実は無動だにしない」

高織が今まさに伊織に手をかけようとした瞬間、一気に戦局は変

わ
つ
た。

瞬間、伊織の殺意――殺気が一気に膨れ上がった。

理由など分らない。だが言える事があるならば伊織の殺意が限界を――頂点を超えた事になる。

そして戦いは一氣に変わる。一氣に変化する。

かつて大厄島で闇口憑依と対峙した際、彼女はその圧倒的な殺意により実力差全てをひっくり返した。

殺意一つ。されど殺意一つ。

ローゼラティゴ
「これは刺鞭。私の持つ得物の一つです。まあ——言っても無駄でしょうけど」

高織は言葉をかける事をとうの昔に破棄した。
既にそれが通じる状態ではない。

衝動を抑えきれなくなったのだと考えた。

勿論、本当は全然違うのであるがここはそれを語る場所ではない。

「私の大切な師匠を——大切な人を奪い取ったアイツらを私は許すわけにはいかない。だから私は逃げるわけにはいかない。逃げたら、私は師匠に顔向けできないのだから——ッ！」

トゥイッケア
高織は樹槍を片手に携え、駆け抜ける。

しかし、伊織はそんな彼女を遥かに上回る行動を見せる。

トゥイッケア
樹槍を『自殺志願』で切ったのだ。

「なッ——！？」

全ての全てが規格外。

全ての全てが予測外。

全ての全てが観測不能。

全ての全てが——想定外。

それが無桐伊織の持つ可能性だ。

そして、『マインドレンデル自殺志願』の刃先が高織を今まさに襲うという時、その動きが突如として止まった。

そう、無桐伊織は——ある赤き最強との契約で人を殺せない。

否、殺す事を制限された殺人鬼なのだ。

「……いけません、いけません」

それはまさに、かつて大厄島で彼女が口にした言葉と同じだった。それを高織は知らない。だからこそ、伊織の言葉の意味を彼女は

理解できなかった。

「危ないです危ないです、間違つて殺してしまうところでした」
(…………やはり変わっている…………)

初めて会った時からずっとこんな調子だった。と高織は連想する。
無桐伊織。それは彼女の——高織の知るところでは全滅した零崎
一賊の中の生き残り。
同時に、彼女が強く憧れていた人物である。

「私の負けですね…………」

そう、この瞬間伊織の全てを高織は見て、口にする。それは清々
しいまでの降伏宣言だった。

「零崎人識さんのところへご案内いたします、伊織さん」

「わお！ やつとですか！」

「では行きましょうか。早くしないと最悪私達の側に来なかった以
上、アイツらの刺客が人識さんのところへ向かっているかもしれないま
せんし——」

と、そこまで言いかけた時だった。

それは突然現れる。

そう、何の前触れも無く、何の前置きも無く、まさに唐突。

「あたしに黙つてなあに面白そうな事始めてんだ？」

その言葉に伊織は震え上がった。顔が一気に青ざめる。

高織はこの唐突な声の主が誰なのか理解できなかったが、それを
すぐに把握する運びとなる。

「あ、あ、あ、哀川のおねーさん……………！」

伊織の言葉に精神を揺さぶられたように、高織も声を荒げる。

「あ、哀川って……………まさか、『人類最強』の哀川潤！？」

そう、人類最強の請負人にして死色の真紅。赤き征伐、砂漠の鷹、疾風怒濤、一騎当千、赤笑虎、仙人殺し、嵐の前の暴風雨——といった様々な異名とその数々の武勇伝と伝説を持つ人物——哀川潤の登場である。

「なあ、哀川潤についてどう思う？」

「突然ねえアンタも。えーっと、哀川潤だっけ？ あれはもう『最強』でしょう、やはり」

「ああ、確かに『最強』だ。というより、『最強』以外に述べる言葉が見つからない」

「ところで、何でまた哀川潤の話題を出したの？」

「いや、俺はあの存在を、哀川潤を相手取った事があるんだが——アレは強過ぎる。『最強』という言葉を思い知った。しかし、俺は一方で思う。あれを『最強』と言い切るのは早すぎるのではないかとね」

「なんでよ」

「『最強』は常に『最強』でなければならぬ。しかし、哀川潤は全勝していない。かの噂の『結晶皇帝』、六何我樹丸は『生涯無敗』だと聞いているからな」

「『生涯無敗』と『人類最強』。確かに考えてみればいかなる物を貫く矛といかなる物を貫く矛の激突ね。あ、いかなる物を通さない盾といかなる物を貫く矛か」

「そう。この二人が激突したとかよくは知らないがその結末は闇の中だ。真相を知る者は——もう誰もいないからな」

「で、結論から言っと何が言いたいのよ？」

「哀川潤を『最強』と俺は言わない。ただ、それだけだ」

それは、断定的な口調だった。

（零崎高織VS無桐伊織——勝者、無桐伊織）

第貳日目 零崎高織VS無桐伊織（後書き）

今話のテーマ

- ・ 零崎高織VS無桐伊織
- ・ 哀川潤、登場！

今回はこの2つでした。

といっても、哀k——じゃなかったです、潤さんはほんの少しの登場となりましたので本格的な登場はまた後々という事になります。そして、今回の話のラストを締めくくった一言は凄まじい一言だったと思います。

潤さんの目の前で言ったら恐らく一瞬のうちに蹂躪される事間違いない！

さあ、今回は行識に戻していききたいと思います。

というより、第壹目の続きじゃないのかよ！と今回の話を見て感じた方も多いと思いますが、これら2つは今回のストーリーで一番最初に行う戦闘シーンでしたので勘弁していただきたいと思います。では、次回お会いしましょう。

第参日目 闇口靈衣（前書き）

今回は行識サイドに話を戻してお届けします！
それではどうぞ。

第参日目 闇口霊衣

ナイフが襲い掛かる。

身体の反応は時として物体運動を遙かに下回る。

それは世界にとつて不条理ではなく、理に乗っ取っている。
迫るナイフ。

命中まで、残り——0.5秒。

だが、行識は咄嗟に——目を見開いた。

瞬間、ナイフが静止する。行識はその一瞬を利用して、ナイフの直撃する箇所から動き——そしてまたナイフが動き出した。

「い、いつの間にそこに……」

人識は酷く動揺している。

人識には一切の事が分からない。気付けば、行識は一瞬で移動したように見えたからだ。

「流石ですね、零崎行識——。我が主人が最も恐れる男」

「それは光栄だね……」

突如として現れた女性——闇口霊衣は静かに語る。一方の行識は様子が一変していた。

人識とのつばぜり合いですら一切の息切れを見せなかった彼が——肩で息をしているのだ。

『人識、すまぬが行識を援護してくれんか』

「ああん？ どういう事だよ？」

零の言葉に人識は疑問符で返す。

『行識にはな、時を操作する力があるのじゃ。じゃが、しかし——それを使うと行識の体力は一気に削られる。ある程度のコントローラは簡単じゃが、その物体の時を一時的に静止させたりしてしまえば——ある程度タフである行識でもかなりの体力を消耗する。大方、あの霊衣とやらの追撃を避けるべく、一瞬——周囲の時を完全に止めおったのじゃよ。行識は』

「時の操作？　おい、傑作すぎるだろそりゃ……」

『恐らく、ある程度は戦えるじやろうが——何せ相手は殺し名序列第二位の闇口。下手すれば行識が返り討ちに遭うかもしれんな』

「その幽霊と思われる存在にひとつ忠告しておきましょう。この状況下ではいかなる手を使おうともわたくしを打破する事は不可能と判断します。わたくしの中の最大の脅威——零崎行識は相当疲弊している。先の攻撃は効果がかなりあったようですね」

闇口霊衣は冷たくそう言い放つ。

その周囲を包むのは冷氣と述べても過言ではないほどの絶対的な威圧。

人識は生まれきって生粋の零崎なのであり、殺し名としての歴もかなり長い。

そんな人識が——その威圧感に一瞬、吞まれかけた。

恐怖。戦慄。慄然。

背筋は凍るし、足もすくむような感覚。岩陰があれば、その陰に身を隠したいほどだ。

それほどの絶対的な威圧感である。

「まあ、零崎行識を殺す事が出来れば——我が主人の野望も完璧に、完膚なきまでに成就が約束される。零崎行識。あなたを殺す事——そして、《零崎一賊》を絶滅させる事。それこそが我らの目的」

「おいコラ待て。何が一体どういう事が説明してもらおうか。俺、ちーつとワケ分からなくなってきたぞ」

「死ぬ者に語ることなどありません。確か——零崎人識、と言いましたか」

「確かつてなんだよ、確かつて」

『人識よ、侮ってはならん。あの者の実力は恐らく——』

「ああ、俺より上だわな」

人識はそこで零の言葉を切るように口にする。

しかし、一方で人識もナイフを構える。ナイフを持つ腕を目と同じ高さまでにまで合わせ——ナイフを闇口霊衣に突き立てるような形で人識は言った。

「闇口霊衣。あんたを——」

『お前さん、まさか……』

「……なるほど」

零は驚き、そして霊衣は戦闘態勢に入る。そして——人識は言った。あの言葉を。

「殺して解^{はら}して並べて揃えて晒し——ッ!？」

「そんなものを言わせるわけが無いでしょう」

不意打ち。

そう、不意打ちだ。零崎人識の零崎開始の言葉を言い切る前に闇口霊衣は奇襲を仕掛ける。

勿論、ある程度戦闘態勢でいた人識ではあるが、霊衣の攻撃はその人識の判断力を上回るほどの攻撃速度。

裏の世界——暴力の世界そのものを否定するような言葉だ。

名乗りそのものが一般化しているわけではないが、それでもこれ

が比較的人識の中ではメジャーであつた。

だが、霊衣は——それすらを上回る。奇襲がないと思つていたわけではない。しかし、奇襲にしては速過ぎる。

「死になさい、零崎。あなたの死は野望成就の糧と——」

「そんな事をさせるわけがないでしょう」

否、行識が間に入り、《無銘》^{むめい}で霊衣の攻撃を——ナイフの一撃を相殺させる。

霊衣は舌打ちをすると、距離を置いた。

間隔は——10m程度と短い。

「零崎行識に零崎人識。2人同時となると多少不利かもしれませんがね——まあ問題ないです。わたくしには——」

これがありますから。

それだけ言うと、彼女は懷からナイフをもう1本取り出す。

闇口霊衣。彼女は確かに強い。

だがそれはナイフを1本持った状態で既に充分過ぎるほど。だが、彼女は——2刀流のプレイヤーなのだ。

「わたくしに2本のナイフを持たせるほどの連携力——とまではいきませんがわたくしも一応はプレイヤー。全力を持つてお相手しましょう。全力を持つて破壊させていただきます」

否、闇口霊衣の姿が消失する。

すぐさま周囲を見渡す行識と人識。しかし、闇口霊衣はどこにも見当たらない。

行識は零に言った。

「零、特定できる？」

『うむ、この周囲からは動いておらん。しかし……闇口霊衣という女、信じられんな。ここまでの実力者とは』

「正直、傑作すぎるだろこれは」

「ええ傑作ですね」

『行識、人識。ワシがお前さん達を援護する。^{サポート}闇口霊衣の技とて完璧ではないからの。目には目を。霊には霊を——じゃ』

「駄洒落じゃねえか!!」

こんな感じで零崎行識と零崎人識の共同戦線が締結される。

闇口霊衣は冷静だ。今のやり取りも全て見ていた。こんな同盟で自分が敗れるという確証は無い。

寧ろ逆だ——勝率が上がった、と判断する。

しかしそれでも闇口霊衣は至極冷静。そう、静かである。

静かに、冷たく、主人の奴隷となり、主人の所有物となり、そして——主人の命を実行する。

それが彼女の属する——《闇口衆》。

（しかし、それでも——確実に。ここは零崎——）

『行識、後方じゃ！ 後方におる!!』

零の言葉は唐突。闇口霊衣は目を見張った。自分へと迷わず攻め立てる零崎行識と零崎人識。

何の迷いも無く——特攻を仕掛ける。

霊衣は油断などしていなかった。足元をすくわれないようにもした。

では何故——それはまさしく、一瞬だった。

零が、闇口霊衣がやって来る周期を完全に見切っていたからであ

る。

そう——闇口霊衣のルートを完全に読み取っていた。闇口霊衣は相手の事を感じするために、2人から遠く離れる事が出来なかった。だからこそその捕捉。だからこそ——発見だった。

（これは……終わりがもしれませんね）

既に決着は着いた。2人の速度は、今から霊衣が動いても間に合
いはしない。

霊衣は静かに目を閉じようとしている——まさにその時だった。

「そんなもので諦めてもらっては困るぞ、霊衣」

「——！？」

突然として響く男の声。

そして気付けば、零崎行識の左腕と零崎人識の右腕は1人の男の
両手がそれぞれ掴み——動きを止めていた。

そして——行識はその声に聞き覚えがある。いや、行識だけでは
ない。闇口霊衣もまた——聞き覚えがあった。

いや——聞き覚えるのが常識、というレベルの話だ。

震える声で行識はそ、そ、そ……と言う。

そして、その人物は静かにその両腕を離す。

その直後、行識はすぐさまその人物と対峙するように背を向く。

行識は言った。

「空時元雨そらじげん！——！」

「げ、元雨様………」

激昂する行識に、腰が抜け切った闇口霊衣。

零崎人識は静かに――その背後を、空時元雨を見る――。

（零崎行識&零崎人識VS闇口霊衣――強制終了）

第参日目 闇口靈衣（後書き）

という事で今回は新キャラの空時元雨そらじげんつが登場です。

次から次へと新キャラが多く出て皆さん混乱しているかもしれません。が許してください。

そしてこの空時元雨は一体何をしでかすのでしょうか？

描写だけで闇口靈衣以上の存在だという事はご理解戴けると思います。

その他諸々の事はまた次回で。

第肆日目 主

空時元雨。

その人物を一言で言うなら、不可解極まりない。

ボサボサの黒い髪に紺色と黒のタートルネック、黒の革ジャンに黒のジーンズ。両手を黒の手袋を着け、少しチェーンがジーンズに着いており、その下を紐のついた長いブーツで支配していた。

だが、その全てを一蹴するように圧倒的なまでの不可解さを出していた元凶——それは黒をここまで極めきったというのにその真逆をいく、白き仮面を顔面につけていた事だ。

眼の部分と口の部分、そして鼻と思われる部分が少し空洞なあたり、そこから様々なものを見たりするのだろう。そういった予測自体は極めて簡単である。

しかし、一方でこの人物——空時元雨の考えは一切分らない。それが——零崎人識から見た第一の印象だった。

そう——不可解なのだ。顔に面など、どこの人類最悪を真似たのだろうか。

そんな事を気にしたのか——いや、まず気にしていないだろう。空時元雨が口を開いた。

行識に圧倒的な殺意を向けられているのにも関わらず、だ。

「霊衣、いつまでそこにいる。ここは俺が抑え込もう。お前は先に帰還している。今のお前は足手まといでしかない。まあ——お前の新しい可能性を見られただけで、俺は満足だが」
「りよ、了解しました」

そんな言葉を霊衣が零すと——悔しそうに、何よりも不服そうに

零すと一瞬にして消失した。いや、消失したというよりは闇口の暗殺術の一つを使用したのだろう。

空時元雨は静かにその顔を——人識と行識へと向ける。

「空時元雨……こつもあつさりご登場願えるとはね。ラスボスじゃないのかい？」

「いきなりメタ発言は勘弁して戴きたいな。まあ——ラスボスなんだろうけどよ、俺は」

「メタ発言を初っ端から二人とも交わしてんじゃねえよ!!」

鋭く刺さる人識の突っ込み。

まあ、両者の発言がメタ発言に変わりは無いので人識の言葉も理解できなくはない。しかもそれが敵対する者同士の第一声なのだからなお更だ。

どうせなら少し話した中でして欲しいものである。

「さて……初めましてだね、零崎人識君。俺の名は——まあ大方理解こそしているんだろうが改めてさせてもらおう。俺の名は空時元雨。先の闇口霊衣のご主人様——といえば色々と説明はつくだろう」
「おい、アンタ——なんでまた零崎一賊を完全壊滅させようと企む？」

「ん？　なんだ霊衣のヤツ——言わなかったのか。まあいいさ、俺も今は語るときでない事くらい理解している。その行識君は今にも俺を殺したくてうずうずしているんだろうが、まあ今の行識君では俺を殺す事は絶対に出来んよ。俺は彼に一度勝っている。どうせ同じことになるのがオチさ」

「そんなのはやってみなければ——分からないじゃないのかよ？」

「いや変わらない。今の君達二人が同時にかってこようともし——君達程度の実力で俺を倒す事は不可能」

「空時元雨……!!」

一方で、そんな言葉を漏らす行識。そんな彼の右手に握られているのは拳銃。左手には刀子《無銘^{むめい}》。

今にも襲い掛かりそうな——まさに一触即発とした雰囲気の中、空時元雨はくつくつくと笑い——

「懲りないなあ、行識君。君とは以前対峙した時に教えてやったじゃないか。君程度の実力でこの俺を仮にも殺そうとするなど——不可能だと。君はその時に死に掛けている。それを忘れたのか？」

「あの時の僕とは違う。あの時のようにはいかない」

「自信満々だな。こちらは今のところ君と戦うつもりはさらさら無い。今の君を相手取るのも悪くは無いが、どうせならもう少し張り合えるくらいになってから相手になろう」

「今ここでアンタの時を破壊してやってもいい」

「くつくつく……時の破壊、ねえ。考えてみれば君にどうしてそんな力が宿ったのか——聊^{いささ}か不思議でしかない。まあ、それが運命という事かな」

空時元雨——零崎人識は感じていた。

空時元雨は直木飛縁魔^{なゐきひえんま}よりも、生涯無敗の《結晶皇帝^{クリスタルカイザー}》、六何我^{りっかが}樹丸^{じゅまる}よりも——表に出ない強さでは彼が見た中で過去最強の実力を持つているだろう。

表に出ない強さ。しかもそれが並の殺し名を遙かに上回っている。この男は——空時元雨との直接対決は今の彼ら二人にとって危険なものだと、人識は判断した。

「行識。そいつに手を出すな」

「……どういう事ですか？」

「そいつの強さは並のレベルじゃねえ。並の殺し名を遙かに凌駕してやがる……下手に戦えばコッチが本気でやられるぞ」

酷く冷静に言った人識。それがあまりにも不審に思えたのだろう。行識から殺気が抜けていくのが見えた。警戒そのものをしている事に変わりないが、自分から仕掛ける事が無くなったただけでも大きいだろう。

それを見た空時元雨は再び笑い——そして言った。

「いい選択だ、零崎人識君。この俺と戦わない方がいいという選択肢は極めて正しいといえるだろう。まあ、行識君も俺の——いや、俺達の事を知らないだろうから説明を軽めに挟ませてもらうおう」
『さつきから黙って聞いておれば、お前さんは全く持っていて意味が分からんのお』

「お前ほどではないさ。……というかお前はお化けか!？」

妙に普通の、月並みリアクションの空時元雨である。

「かなり変わったペットを持つてるな。誰のだ？」

『ワシはペットではない!!』

「あ、僕のペット」

『お前もか、行識イイイ!!!』

零の頭から湯気のようなものが一瞬見えたが、人識はそれをスルーする。イチイチ突っ込んでいたら身が持たないような感じがするというのが最大にして第一の理由だ。

「俺達は救世主^{メシア}。そして俺はその救世主^{メシア}のリーダーでもある。俺達の目論見は——まあ気にしなくてもいい。時に人識君、君は疑問に思ったことは無いかい？」

「ああん、何がだよ」

「何故暴力の世界で——いや、呪い名に零崎と対をなすものが存在

しないのか。気にした事は無いかい？ 疑問に感じた事は無いのかい？」

「何？」

「殺し名は七、呪い名は六。考えてみれば釣り合わないじゃないか。第三位の零崎は。対極が無い以上」

「んなもん知らねーよ」

「知らない、か。まあそれはそれでいいだろうな。だが、俺はその存在を認めるわけにはいかない。ああ、分からなくていい。今の君に理解してもらおうなど思っていない。微塵ともね」

空時元雨はそう言い切ると、二人に遂には背を向けた。立ち去るつもりなのだろうか。

彼は言う。

「さて、これで時間稼ぎも出来た。間もなく——『赤色』が物語を掻き回しに来るだろう。まあ、それくらい計算は出来ている。君達は赤色と会う事だ。色々といい経験になるだろう」

「赤色ってまさか……」

顔色がどんどん青ざめていく人識を他所に、空時元雨は断言するように、はっきりと言った。

その名を。

「ああ——哀川潤、だ」

否、轟音が響き渡る。

彼ら二人の背後からそれは響いた。

「なるほどねえ……こりゃ面白い事になってんじゃん」

二人は振り向く。彼らの目の前にいたその存在は——空時元雨という存在を一瞬でもよく思わせた。

それほどの人物。それほどの力を持つ人物こそが、哀川潤。哀川潤は、零崎人識の持つナイフを一瞥すると、

「なあに約束破ってんだよ、零崎クン？」

静かに微笑みながら言う。完全に目は笑っていないかった。

人類最強の請負人、哀川潤。満を持しての参戦である——！

「お帰り」

「ああ、今帰った」

「霊衣は休んでるわよ」

「分かっている。後で慰めてやるか」

「私の前でそれを言わないでよ、ジェラシー感じちゃうんだから」

「そうか。で、アイツは？」

「あー。彼？ 今は寝てるわよ。何？ もう動かしちゃうわけ？」

「まあな。それを本気で視野に入れなければならなくなった、という事さ。それともう一つ……」

「“人類最悪の遊び人”との接触？」

「ああ——俺達の物語を一気に動かすためにあの存在は必要不可欠だ。奴さんやつも乗ってくれるだろうよ。俺達のすることは物語を——

終わらせる事に直結しているからな」

空時元雨は静かに――そう語った。その仮面の下に映る表情は――
未だ分からず。理解不能である。

（零崎行識&零崎人識VS空時元雨――不戦 勝者なし）

第肆日目 主（後書き）

今回の話は人識らしさをちゃんと出せたかが不安でした。

そして同時に今回は空時元雨というキャラが明細・・・とまではい
かないでしょうが結構書けたいい回だったと思います。

次回からは哀川さんが乱入し、どうなるのか？

それはやはり次回以降のお楽しみです。
では！

第五日目 零崎行識

突然なんだけれど、僕の話に少しばかり付き合っ
て欲しい。

いや、それほど急用というわけではないんだ。

でも、少しでもいい。だって、今しておかないとこ
ういう事をするタイミングは無いと思っ
ている。

まあ、本音のところから言つと、作者さんか
らこつこついう時間……
え？ メタ発言禁止？

いやあ、それはちょっと辛いところがある
つて。

まあ、そんな前置きはさておきとして
おこつ。

これからする話は少し前の時の話だ。最
も、僕自身は今過去の世
界にいるわけだから何だか矛盾が生
じてしまう。

だから、訂正しよう。

これは僕——零崎行識の人間関係を
少し話させて欲しい。

……………え、これもメタ発言なの？

少年は彷徨っていた。

服には大量の返り血が浴びせられている。衣服だけでなく、細い腕、靴、顔面のいたるところに――返り血があった。

少年は感じる。

――ああ、どうしてこうなってしまったのだろう――かと。

彼の周りの人間は全て死滅した。町一つ――否、市一つが今や消滅の殺戮による壊滅の危機にあった。

それがまさか――若き少年の仕業だとは思うまい。しかし、彼の返り血を見れば、彼が犯人だろうという判断は充分に出来る。

少年の名は不明。いや、名はある。今は無い。

そう、彼こそが後の零崎行識。当時十二歳の頃の話だ。

殺戮衝動は限界を越え、今やオーバーヒートしていると言って過言ではない。

もつと言いつつてしまえば彼は零崎として覚醒した、というべきだろう。

当然、当時の彼に暴力の世界など分かるわけもない。ましてや、今の彼に近寄ろうとする人間は――

「よお」

いた。

少年――行識は見る。その人物を。声は高い方だ。女性だろう。その判断は間違っていない。文字通り女性だった。

赤い髪にワインレッド色のスーツを身に纏った全身一色がまさしく赤色。目つきはとても鋭い――というか悪そうだった。

それが行識の第一印象。人類最強の請負人にして、死色の真紅――哀川潤を彼は初対面でこう感じた。『不良?』と。

「誰?」

「うっわ。いきなり誰とかひでーなー。で、少年よ。お前は一体何をしているのかな?」

「さあ、分からない」

「分からないとかねーだろ。その返り血。どんだけ人を殺したんだよ、分かってるか? 今ここ、お前一人のために市民全員に避難勧告出てるんだぜ?」

「そう。妙に人がいないと思ってたら……そういう事」

「へえ、動揺しねーんだな。結構クールじゃん?」

「クールとか……どうでもいい」

行識の手に握られる二つのナイフ――一つは刀子《無銘》^{むめい}。そしてもう一つは――錠明^{アンチロックドフレード}け専用鉄具なのだ。

その両者を哀川潤は所持していたから知っている。それを何故この少年は所持しているのか――不思議に感じていた。

勿論、哀川潤も某戯言遣いから話は聞いているから大体の事情は把握できている。

「それ、どこで手にいれた?」

「これですか」

人類最強を相手にぶっきらばうな反応で返す行識。彼の中にホツホツと湧き上がる感情。

それが殺人衝動だという事に行識は気付いていない。

「さあ、拾いました」

「拾いましたってお前……」

哀川潤ですら、その素っ気無い返し方に困惑する。

全てをどうでもよく思い、そして自分の思うがままに動いているこの少年。しかし、哀川潤はそれ以上にこの少年から何かを感じていた。

「ところで殺していいですか？ 何か殺したいんです」

「ん？ ああ、構わないぜ。殺せるもんなら——」

——殺してみな。

哀川潤はそれだけ言った。行識がその挑発的な言葉に腹を立てたか——否、全く苛立ちは込みあがっていない。

「じゃ行くか」

一氣に行識は駆け出した。

その脳内で今、どのような処理がされているかなど、本人にも分からないだろう。せめて分かるとしたら今の彼は性欲とか食欲とか睡眠欲といった全ての欲望を殺人衝動へ昇華させている。

二つのナイフが太陽に反射して光る。しかし、彼はここで選択を間違えなく誤っていた。

相手は人類最強——そう、勝てるはずがないのだ。勝てるわけが無い。

「少年よ、お前……ちーっと眠ってな」

その一言と共に、行識の意識が途絶える。

何が起こったか、行識自身にも分からないが——僕はここで死ぬのかなと、行識は思った。

行識の目が覚めると、彼はスポーツカーに乗っていた。真っ赤な車だった。その運転席にはあの女——哀川潤が座っている。

しかし、行識は酷く落ち着いている。今まで奥底に溜まっていた何かがい切り吐き出されたような爽快感——そう、違和感を感じていた。

やがて哀川潤は目配せで行識の意識が覚醒した事を確認する。車はどこを走っているのか分からない。しかし、どこかへ向かっているのだろう。それだけは理解できた。

「よお、少年。目が覚めたかい？」

「はい、一応は」

「一応、服テキトーに着替えさせておいたから。あたしってセンスいいーだろ？」

「……………」

全身赤一色だった。

トレーナーからその上に羽織っているジャケット、更にはジーンズ。普通に考えたらまず有り得ないセットである。

行識は目を点にし、同時に苦笑いを浮かべながら――

「え、ええ。ありがとうございます」

と、一応の礼を述べておく。

勿論、行識はここまで来ると逆に恐ろしいとは思えなかった。一つくらい赤色じゃないのがあればマシだったかもしれないが、全てが全て赤一色（幸いにも髪の毛などは弄られていなかったが）だと恐ろしいとは思えない。

「で、今どこに向かっているんですか？」

「今？ さあね。地獄じゃね？」

「あなた死ぬ気ですか！？」

「はははは！ 冗談だよ、少年。ところで、すっかり殺人衝動も無くなったみたいだな」

「殺人……衝動？」

「あたしとバトるまでのお前の事だ。人を殺したくて殺したくてたまらない状態だ」

「人を殺したい状態……ですか」

「そう。お前を生かすのに少し苦労したもんだぜ。心停止したくらいだし」

「心停止とか冗談じゃないので止めて下さい!!」

何気恐ろしい事を言う。

想像もしたくない。意識が無いまま、そのままオダブツというのは一番考えたくない最悪のパターンだ。

「まあ、一応名乗っておくか。少年、お前は名乗らなくていいぜ。黙ってあたしの名乗りを聞いておきな」

「名乗りつて戦隊とかじゃないんですから……出来れば普通に聞きたいです」

「哀川潤。職業は請負人だ」

哀川潤は静かにそう口にした。

「請負人……？」

「まあ何でも屋って考えればいい。“人類最強の請負人”って周りからはよく言われる。最近はいーたんが色々仕事こなすからつきり減ってんだよな、あたしの仕事」

「いー……たん？」

行識は疑問符をつけつつ、その言葉を反復する。

哀川潤も流石に気にしているようで、説明しようかい？と親切に言ってきたのでお願いします、と行識は返した。

「いーたんってのはあたしの同業者さ。請負人家業をあいつもやってる。まあ詳しい事は色々と言えないけど、戯言遣いなんて呼ばれてたな。なつついもんだぜ、ありゃ」

「戯言遣い……ですか」

「ああ。で、少年よ。お前には力をつけてもらおうと思う」
「力？」

哀川潤はこくん、と首を縦に振る。

力と限定しても本当に多種多様だ。知識もあれば、腕力といった力もある。しかし、哀川潤がその中で指した強さは当然、身体能力といった部分だった。

「まず言っておくとだな、少年。お前は《零崎》だ」

「《零崎》？　なんですか一体」

「まあ、普通のリアクションだな。《零崎》っつーのは暴力の世界にある殺し名の一つさ」

「……暴力の世界ってなんですか？　それに殺し名ってすつごい危険な香りしかしませんけど」

「ああ、危険さ。危険だらけの世界さ。あたしも出来る限り、関わり合いになりたくねえんだよ」

「で、その《零崎》と僕がなんで関係あるんですか？」

「《零崎》っつーのは、流血のみの殺人鬼集団。……まあ、あたしも細かくは知らない。あたしより知ってるやつに引き合わせる。ていうか、当人達にな」

「《零崎》の人間に、ですか？　物騒な感じしかしませんよ？」

「大丈夫大丈夫、あたしが色々と圧力加えてるから。それにあいつら結構面白いしな」

そう言っつて、哀川潤は笑う。まるで何かを思い出したように。

くくくつ、とそれこそ満面の笑みを浮かべていた。

そして、哀川潤はそれに——と言い出す。

「あたしは育てに向いてない。小唄のヤローに任せてみたいがお前は真心ちゃんと違う。ステータスとかが一般人だ。どう見ても向いてないだろうし。それに殺人衝動の面を考えれば《零崎》に任せるべきなんだよ。殺人衝動の抑え方とか、ある程度の生き方くらいは

学んできやがれ、少年」

「はあ……」

「あ、間違ってもあたしを殺そうとなんてすんじゃねーぞ？
……
いやそれ自体あいつらがさせるわけねえよな」

ますます意味が分からなくなっていく。

行識の理解を超えて、もう何もかもが分からなかった。

「まあとりあえず——お前、名前はなんてんだ？」

今更な質問だった。

行識は答える。強い意志と眼光を宿して。

「名前は無いです」

零崎一賊。

殺し名序列第三位にして、殺人鬼集団。

その唯二の生き残り——零崎人識と無桐伊織に彼は会った。

その顔は今でも思い出したいし、考えたくもない。描写は省きたかった。

哀川潤は交渉する、と言っていたけれど、随分と暴力的な交渉だったのを、行識は見て感じた。

十分もしない内に結果は出たらしく、行識の世話は事実上、押し付けられるようだった。

「じゃ、頼むわ」

そんな一言を残し、人類最強は去っていく。

そして、人識は深いため息を吐いてまず第一声に言った。

「お前、名前は？」

「名前は捨てました」

「なるほど、傑作だ。だったらまずはお前の名前を作るか。《零崎》としての名をな」

「《零崎》としての名ですか？」

人識は相槌を打つ。

行識は考える。しかし、思い浮かばない。当然だ、ノーヒントで名前を作る事はできない。

しかし、伊織が動く。行識のジャケット裏にあった白紙のメモを偶然、背に回った際に発見したからだ。

「『そいつの名前は零崎行識だ。じゃー頑張れよ少年 by 優しい優しい哀川潤姉さん』ってありますよ、人識君」

「あんの人類最強……何もかも勝手に決めやがって」

拳を震わせ、怒りを滲ませる人識。冗談抜きで怒っているのは明確だった。

「おい、お前！」

「は、はい！」

「お前には色々知ってもらわなきゃならねえ事が多い。まずは殺し名の世界。そして俺達《零崎》の事をな」

一切の質問をせずに黙って聞け——と人識は言う。

行識は黙って相槌を打った。

「まず殺し名の説明からだ。とはいっても、俺もそこまで深くは知らねえ。もつとも零崎として今、長生きしてるのは俺だが、それイコール暴力の世界を知ってるとは言わない。だから俺の知る限りの全てを話してはやる。そうしねえと、『新しい』《零崎》を始める事はまず不可能だからな。で、本題に戻るがまずお前は四つの世界そのも知らないよな。そこから説明を始めるぜ。しっかりとついて来いよ？」

まず、お前が本当についさつきまで、数日前までいた世界を表世界つつーんだ。これは説明なし。お前が平穩らしき平穩を送っていた世界だからな。次に——あかがみ そうだな、いいがみ 四神一鏡つつーのうしがみ が支配する経済力の世界。これは赤神、えかがみ 謂神、氏神、おりがみ 絵鏡、檻神の五大財閥があれこれしてるみてーだ。あんましカンケーは無いけどな。三つ目に玖渚機関を筆頭とした政治力の世界。ここも説明はパスだ。あんまし知らないからな。で、肝心な部分だ。話についていけるか？」

人識の言葉に行識は首を縦に振る。

勿論、実際のところは理解が一切追いついていない。

けれども、この時点で一番聞きたい肝心なところが出ていなかった以上は質問のしょうが無かった。

「で、こっからがお前にとって最も肝心な暴力の世界だ。心して聞

けよ——俺は同じ事を何度も言うのは好きじゃねえんだ。分かったなら首を縦に振れ」

行識は人識の言葉に黙って頷く。

そして行識は聞いた。暴力の世界のことを。少なくとも、無の状態よりは知識はあるべきだろう。

ここは、そういう世界だ。

表世界ではなく、裏世界の住民となった零崎行識にはそれを知る権利と義務が与えられる。

そして、説明から気づけば早二時間近く。そこでようやく人識の簡単な説明が終わりを迎えた。

勿論、もっと語れるだろう。ましてや素人同然の行識が相手となれば語れる以上に語らなければならない。

だが、一気にその全てを網羅させたとして理解が追いつくはずが無い。まず人識が教えたのは殺し名と呪い名の二つだった。

こんな始まり方で行識の新しい生活が幕を開ける。

哀川潤と遭遇し、『零崎行識』という名を与えられた零崎行識。人識や伊織と共同生活を開始してから早三ヶ月の月日が経過した。

「人識さん、お願いがあります」

「お願い？」

それは唐突だった。

いつものように起き、人識と伊織が今日を生き延びる策を労し、行識は行識で平凡な日常を送る中、ある晩に行識は人識に声をかける。

「人識さん、このナイフを知りませんか？」
「ナイフ？」

行識が取り出したのは二本のナイフ。

人識はそのナイフを見て、見開くように確認した。《無銘》^{むめい}ではない。彼が持つもう一つのナイフ——それはかつて人識自身が所持していたナイフ、錠開け専用鉄具だったからだ。

「そいつ……錠開け専用鉄具じゃねえかよ——！」
アンチロックドブレード

「え、知ってるんですか!？」

「知ってるも何も元々は俺のもんだったんだぜ？ まあ、あの赤いのに取られちゃったんだけどよ」

「な、なるほど……」

人識はまじまじと錠開け専用鉄具を見る。アンチロックドブレードそして口を開いた。

「お前、俺が鍛えてやるよ」

「へ？」

「だから鍛えてやるってんだ。アンチロックドブレード錠開け専用鉄具だけじゃなく、《無銘》^{めい}まで持ってんだ。傑作にもほどがあるぜ、お前。気に入った」

お前なら、俺の技術を盗む資格がある、人識はそう語った。
行識が頼もうとしていた事が偶然の形であれ、一致したのだ。こ

れはこれでもいいというのが本心だろう。

「ただ、俺は弟子なんてもんを持った事がねえ。だから、修行は厳しいし、最悪死ぬかもしれねえ。構わないな？ 引き返すなら今が一番だぜ」

「引き返すなんてしませんよ、師匠」

行識の言葉はその一言で十分だった。
こたえ

人識は傑作だな、と呟く。

こうして、零崎人識と零崎行識の関係図は出来上がっていく。
そして物語は動き——二年の歳月が流れた。

（零崎人識との関係——師弟関係）

第伍日目 零崎行識（後書き）

というわけで今回から少し本編（？）からフェードアウト。
いわゆる過去編です。

まあ、本編でも述べた通り、過去の世界にいて過去の話というのも
またシニールですねw

一応今回は行識が零崎として覚醒した時の簡単な話となりました。

伊織ちゃんの出番がとてもしなかつたですが伊織ちゃんの出番も増
やせるよう頑張ります。

一応既存キャラ陣がちゃんと書けたかなあ？と後書きで強烈なメタ
発言をしてまた次回！と。

第陸日目 零崎行識の人間関係（前書き）

全体に一気にばら撒こうと思ったら集中しました。
まあ、問題はナッシング♪

第陸日目 零崎行識の人間関係

零崎行識が哀川潤に出くわし、零崎人識に引き会わされ、無桐伊織に遭遇し、零崎行識を名乗るようになってから——二年の月日が流れた。

そして彼は今——家出している。

家出、というのは実際のところ大嘘で、現実には彼の師匠、零崎人識から日本中を回って来いという指示を受けているからだ。

零崎人識はその昔、放浪癖が凄まじく、日本中を回っていたという。さまざまな知識や経験はそこから来ているのだろう、と行識は思うし、現実にそうなのかもしれない。実際の解答は本人にしか分からないので、詳しい事は言えないだろうが。

第一、なんでまた無銭の状態で無理やり旅に行けなどと言ったのか——不思議でかなわなかった。

しかし、その中でさりげなく、殺人衝動を抑えるコツも身につけてきていたのも事実。時折暴走しかけるのでそこは人類最強に頼んで無理やり沈静化してもらうが。

最も、普通に考えればそれは有り得ないようで、行識は哀川潤のお気に入りなのだろう、と人識に言われていた。それなら、最初の遭遇で見逃してもらえた理由も納得がいく。

「最近はなああんにもないなあ」

呟きながら、行識はある歓楽街を歩いていた。気づいてみれば、某道楽市に来ていたのであるから行識も自分自身であきれ返っていた。

行識が探すのは寢床だった。食事に関してはある程度我慢が利くし、いざという時の食費もあるので平気だ。それ以上に寢床がほしかった、というのが大きい。

気づいてみれば、何かに導かれるかのように——行識はあるビル群のある一棟の地下にいた。

「……ピアノバー・クラシッククラシック？」

そこには一軒の店がある。

店の前には『Piano Bar Crash Classic』と書かれてあり——そして、その掛札には閉店中を示す『CLOSED』と書いてあった。

しかし、行識にとってそんなものは関係ない。人識の弟子となり、二年近くナイフの扱いに関する厳しい指導を潜り抜けた行識にとって、普通のドアは無意味だ。どこも電子扉だというのに、不思議とこの店はごく一般的な錠の扉である。

行識は錠^{アンチロックドブレード}開け専用鉄具を取り出し、難なくピアノバー・クラシッククラシックの中へと入る。一応扉の鍵は内側から閉めておいた。照明の電源を入れると自然と照明はつく。しかし、その店内はひどく散らかっていた。ある程度きれいにはしてあるけれど、ところどころが錆びている。どうやら、かなり昔の店らしい。

ならどうして照明が入るのだろうか——不思議には思った。そして、静かに置いてあるグランドピアノ。行識は自然とグランドピアノとの距離を縮めていく。

そして、そのグランドピアノの譜面台に置かれてあった譜面を覗

き見た。

「……作曲N O . 6 1『遭遇』……かなり変わってるなあ」

そんな事を呟きつつも、行識は自然と椅子の上に座り、譜面通りにピアノを弾き始める。

この曲の作曲家はかなりの腕を持っているのだろう——行識にはそう感じた。行識は表の世界でピアノを習っていたおかげで多少はできるが、かなり難しい。色々な曲を弾き、そして勉強したが——それら全てがこの一曲に凝縮されている。

失敗したらそこを弾けるようになるまで必死に練習する。休むつもりだったのに、行識は気づいてみると時間を忘れ、ピアノを弾く事に熱中していた。

そして、曲通り——行識は遭遇する事となる。このピアノバーのオーナーの友にして——入りの鍵を持つ唯一の男と。

行識は一切気づいていない。しかし、その男はドアを開けると絶句していた。その位置にはかつての友が座って演奏をしていた席だ。しかし、そこに座っているのはその友ではない。だが、その友を彷彿とさせてしまうようだった。

自然と賞賛の拍手を送ってしまう。

「……………あ」

「素晴らしいですよ、少年くん。まるで曲識くんの演奏を聞いているようでした。不法侵入はいただけませんが、まあ不問としましょう」

「あなたは？ オーナーですか？」

「いえいえ。わたしはただの常連客ですよ。オーナーはさつき述べた曲識くん。……しかし、十八年前にお亡くなりになられました」

「十八年前に？」

「ええ」

男の言葉に行識はどこか思い込みがある。どこかで聞いた事のあるような不快感が襲う。

その思考が少しずつ呟くように漏れ出す。

「曲識曲識曲識……え？ あ、あの零崎一賊三天王の！？」

「三天王を知っている……。少年くん、君は一体何者なんですか？」

至極普通にして真つ当な男の問いに行識は答える。

「零崎行識といます」

「《零崎》……なるほど。生き残っていたのですか……あの惨劇があつてなおも生き残りがいたとは……」

「惨劇？」

「少年くんはご存知ありませんか。十八年前に橙色の暴力の手により、零崎一賊は全滅させられたのです。後々分かったのですが、それを成したのは人類最強と呼ばれる哀川潤と互角と呼ばれる人物だった……と」

「橙色の暴力……ですか」

「さて、では本題に移りましょう。しかしその前にいつまでも少年くんと呼ぶのは相応しくなさそうですね、君にとって。私の独断ではありますが、行識くんと呼んで構いませんか？」

「構いません。ところで、聞いてませんでしたがあなたは一体……」

「罪口商会第四地区総括、及び罪口商会長——罪口積雪です。まあ、結構私も年老いていますからね、当然といえば当然でしょう」

「何が当然なんですか？」

「気にしたら負けですよ行識くん」

はあ、と行識は積雪の言葉に渋々納得する。実際は納得の『な』の文字も無いだろうが。

積雪は近くにあつた椅子に腰を掛け、

「ところで行識くん。私の職業はご存知ですよね？」

「はい、武器職人……でしたか」

行識の回答にその通り、と積雪は首を頷かせ、

「特別に行識くんが望むのであれば無償で武器を提供しますよ。勿論、現存の武器の改良でも受け付けましょう。様々なオプションの設置なども含め、無償でいたします」

「なんでまた」

「惹かれたのですよ。曲識くん亡き後、この店に入れるのは私だけ……事実上、管理を委託されたも同然でした。友の店を潰すわけにもいきませんからそこはのらりくらりと色々な手を使いました。しかし、今日。行識くん、君の音楽を聴きました。当然、曲識くんほどではありませんが私は不思議と君の奏でた音楽に惹かれたのです。熱心に取り組もうとする姿勢に惹かれたのかもしれませんが」

だからこそ——と積雪は言葉を紡ぐ。

その瞳は自然と熱を帯びる。行識が積雪の言葉に吞まれ始めていた。

「私は行識くんを支えていきたい。貴重な逸材ですからね。深い理由は特に無いですが、今の説明が精一杯でして……武器の件、今回は無償で致しますよ」

行識は積雪の誘惑に乘せられていた。

しかし、積雪が裏切ることとはまずないと行識は踏んでいる。理由は単純だ。積雪の目は真剣そのもの。誰かを蹴落とそうとするような野心らしきものは一切見当たらない。

否、積雪には行識を攻撃するだけの理由が何一つとしてなかった。
そして、行識は一つのナイフを取り出す。それは、錠開け専用鉄具だ。^{イド}

「これは？」

^{アンチロックドブレイド}
「錠開け専用鉄具というものです。これを——本来の性能を生かしたまま使える武器にできますか？」

^{アンチロックドブレイド}
積雪は錠開け専用鉄具を手に取り、まじまじと見て——

「可能です。ただ、このまま下手な改造を加えると本来の性能を失いかねません。なので、このナイフの長所を生かした武器にしましょう。銃剣に近い形になると思います」

「銃剣に近づけた形……ですか？」

「ええ」

積雪は首を縦に振った。

そして、二日後にまた来ますと言い残し、^{アンチロックドブレイド}
錠開け専用鉄具を持ってピアノバーを後にした。

去り際、積雪はこうも言い残した。

できればまた行識くんの演奏が聞きたいです、と。

それから二日間。行識は何かしたか、と聞かれたら何もしなかったと答える。

食材はどれも賞味期限をとくに過ぎていてまともに使えないから人類最強から借りた軍資金で食費は賄っていた。寝床はこのピアノバーで取ればいい。

その中で、零崎一賊三天王の事を行識は考えていた。現在の一賊で唯一、三天王全員から面識のある人識から一応の事は聞いていた。^{マインドレンデル}
自殺志願、零崎双識。

シームレスバイアス
愚神礼賛、零崎軋識。

そして――少女趣味、零崎曲識。
ボルトキープ

偶然ではあるが、三天王に密接のあるこの場所に來れた事は何かと奇跡ではないかと行識は思っていたし、同時に三天王の事をもっと知りたくもなった。

行識の中に芽生える好奇心。知る事は悪くない。そう、悪くないはずなのだ。知識は無いよりもあつた方がいだろうし、同時に一賊の事をもっと知る事ができる。

現時点で実戦経験はまったく無いに近い。だから人を殺したこともない。最も、哀川潤により事実上の不殺を彼は言い渡されているようなもののだが。

そして彼は、罪口積雪は約束通り二日の時を経て、再びピアノバ―を訪れる。行識はいくつかの譜面台を睨んでいた。積雪が行識くん、と声を掛けてやっと存在に気づく。

「あ、どうも積雪さん」

「ひどく熱心なですね」

「まあ。一応探ってみたら結構な数の譜面が見つかったので。どれから弾こうかなと。……厳密には弾けるか、ですけど」

「なるほど。まあそこは焦る事無くゆっくり選べばいいと思います。で、頼まれていた品ですが完成いたしました」

そう述べる積雪の右手にはトランクが一つ。その中に改造を加えた錠開け専用鉄具が入っているのは間違いない。
アンチロックドブレイド

そして、積雪はトランクを最寄りのテーブルの上に置き、中を見せる。その中には入っていたのは――

「銃？」

「ええ、当初は銃剣と言ってましたがそのままの銃剣では意味が無いと判断し、収納型の銃剣とさせてもらいました。必要なときだけ

錠開け専用鉄具アンチロックドブレイドが出せるようにしてありますし、当然この銃から錠開け専用鉄具アンチロックドブレイドを取り外すことも可能です。そこは行識くんにお任せします」

行識は錠開け専用鉄具アンチロックドブレイドの収納された銃を手に取る。サイズなどもばっちりだ。積雪は行識の手のひらなどを聞いていないのに、それらを視覚みただけで判断したということになる。

その技術に感嘆とする行識の表情は積雪にも察知できたらしく、

「かれこれ私も武器を長く作り続けていますので、ある程度なら見ただけで判断できます」

「いや、見ただけでここまで精度の高いものは早々作れないでしょう……」

「ところで——その銃の名前なのですが、錠開け専用鉄具銃アンチロックドブレイドガンという名前にしたいと思っています」

「錠開け専用鉄具銃……いい響きですね。気に入りました」

「ならよかったです。一応その銃のまま錠開け専用鉄具を取り出すには引き金の上にあるボタンを押して下さい。そうすれば錠開け専用鉄具アンチロックドブレイドは姿を現すでしょう」

「感謝します、積雪さん」

触り心地などもよい。

これは大きい戦力になるだろう。

行識はその後、罪口積雪に何度もお礼を言って、積雪はこう述べて立ち去った。

「もしまた武器を必要とするならここへ来て下さい。もしくはこの連絡先へ。必要な代価は、行識くんの演奏をまた聴きたいというくらいでしょう」

「さりげなく死亡フラグ立てないで下さい。僕もここへ戻れない

ようなフラグじゃありませんか」

「ははは、冗談ですよ。では、失礼いたします」

積雪は連絡先の示す紙をテーブルの上に置き、トランクを持ってピアノバーから姿を消した。

直後、中へ入ってきたのは――あの赤色の人物、人類最強である。

「よお、こーたん」

「……なんでまた『こーたん』なんですか。別作品の作者さんから訴えられますよ？」

「いやだつてさあ、そこは仕方ないだろ？ 名前がこで始まつてるんだから」

「すつげえメタ発言じゃないですか、そこ！ いったそのこと別の呼び名にしてください！！」

「なら……こーくんとか？ ……あーダメだ、やっぱこーたんじゃねえと」

「……で、何の用なんですか？」

行識はため息と呆れ顔を浮かべつつ、哀川潤に聞いた。
何も考えずに哀川潤がここを訪れるわけが無いのだ。

「何の用？ いや別に何も」

「まさかの無用！？」

「いや、ただの暇つぶし」

「暇つぶし！？」

「いや、実際は用あり」

「やっぱりあるじゃないですか！！」

「ところで、今の《罪口》だろ？ どういう関係だ？」

「……僕は付き合いが浅いんですよ。曲識さんのお店らしいです、こー」

「へえー、ここ曲識の店だったのか。あいつあたしに黙っていたの間に……」

軽く怒っているように見えたがそこは見なかったという事で行識は話を進めることにする。

一方の哀川潤の拳はどうみても怒っているようにしか見えなくらい強く握り締めているのが目視で確認できる。

「で、潤さん。今日は何の用ですか？」

「ん？ ああ、行識。最近あれの調子はどんなのさ？」

「……あれですか」

「ああ、あれだよ」

行識は人識にも、伊織にも、そして旅の道中で出会ったあたらしい『家賊』にも言っていないことがある。

それは——行識が時間に関与できる特別な力を持っている、ということ。

傍から聞けばそれは超能力にも感じる。いや、実際には超能力というレベルを遥かに越えていた。

そもそも、この能力の兆候が見られたのは二年前、人識と伊織に邂逅してまもなくだった。突如として脳裏に映った映像がその僅か数分後に現実となる現象が起こったのだ。

それが幾度も続き、不思議に思った行識は哀川潤と連絡を取り、密かにこの事を打ち明けた。

哀川潤も当初は信じられなかったが、時間の経過と共にそれが嘘偽り無い事実だと判明すると不服ながらも納得してくれた。因みに戦闘でもこの力は役に立っている。哀川潤に使ってもそれ以上の速度で攻撃されるので哀川潤クラスになると無意味に近いが。

「最近は特に兆候も起きてませんね」

「なるほど。ま、あの力は下手に流出していいもんじゃねえからな」
「ですよ」

そうは言っても実際のところ、不殺は貫いても、殺し名などの面識はある。だから行識の名も知られ始めていた。理由は簡単で考えるまでも無い。

全滅していた零崎一賊が再興したのであればその名は一気に知れる。そして、その第一号が行識だった——それだけだ。

「ところで行識。次はどこに行く気だい？ 場所によっては途中まで連れてってやつてもいいぜ？」

「お気持ちだけでもらっておきます。実を言うと考えてません」
「いっつもそれだよなあ、お前。……まあいいか」

諦めが早すぎませんか、と行識。

だって、お前が決めてないんじゃないでしょうもないじゃん、と哀川潤。

何だかんだでナイスコンビである。

「あ、そうだ人識さんに連絡でもしようかな……」

逐一連絡を入れる、これだけは師匠である人識に言い渡されていた事実なので行識は携帯をズボンのポケットから取り出し、電話帳から人識へかけた。

「もしもし？」

『行識どうしたんだよ』

「いえ、特に。相変わらずの定期連絡です」

『ふーん。で、今どこだよ』

「ピアノバーのクラシッククラシックです」

『はあ！？ 曲識のにーちゃんの店ん中いんのか、お前！？』

電話越しからでも人識の動揺は明らかに伺えた。
というか、今まで聞いた事の無いほど——でかい声である。

「師匠、知ってるんですか？」

『ああ、一時期行つてた事があつてな。今から十八年位前になるな
ー。なつつー』

「なつつーとかさりげなく言わないで下さい。仮にもこの世界の師
匠、三十代なんですよ？」

『お前のその発言の方がよっぽどメタ発言だ！！』

「いや、そういう事言う師匠の方が明らかなメタ発言してます！」

『ぎゃあああああ！！！？』

『ちよ、何散らかしてんだお前ら！』

『これはこれで面白いですねー』

『全く面白くなんてねえええええ！！！』

電話越しで何やら揉めているようだった。

そういえばほんの二月前、行識は一人の女性と出会ったことを思
い出す。

美しき木や花と対照的な血を鮮やかに染め上げていた女性だった。
彼女はこう名乗った。

「私の名前？ 木野花織きのかおり」

「花織さん。あなたは《零崎》だと思います」

「《零崎》？ 何言つてんの？」

「家賊になりませんか？」

「家賊？」

「はい。《零崎》は血筋などではなく、流血のみで繋がる家賊。あ
なたにはその家賊になる資格がある」

——なら、なる。

あっさりと花織は承諾——いや、快諾した。

そして、花織の希望で彼女は人識と伊織の元へ向かい、その後居候と化したらしい。

その後の人識からの話によれば、伊織と花織の仲が良いらしく、師弟関係にこちらも発展したとか。何かと急すぎて傑作だ、と人識は言っていた。

そう、木野花織——彼女こそ、零崎高織なのだ。あくまで二年前の。

役者は揃う。

舞台も整った。

そして、遂に物語は動き出す。

一気に加速する。

ジェイルオルタナティブ

代替可能は^{バックノズル}いらぬ。

あるのは時間収斂^{バックノズル}だけ。

そう——時はこれより二年の経過と共に何の前触れ無く訪れる事となる。

歯車の回転は既に——止まらなくなった。

第陸日目 零崎行識の人間関係（後書き）

という事で今回は罪口積雪さんに登場してもらいました。

実を言つと、クラッシュクラシックの書き方をとことん見直しておりまして、色々と苦労した話です。

蛇足で言っておくと、行識のピアノが弾ける設定はこれのためだけに用意しました。

ご都合主義すいません^^；

次回は今話の終わり方通りな展開になると思います。

第捌日目 動き出す時（前書き）

はじめに言っておきます。

今話は読む際にお気をつけ下さい。

第捌日目 動き出す時

「伊織さん」

「どうしました？」

いつも通りの反応で伊織は返す。

声を掛けたのは居候同然で生活をしていた零崎高織——否、木野花織だ。

「伊織さんは《零崎》になってからだいぶ経ってますよね」

「そうですねえ」

「伊織さん、死ぬって事についてどう考えますか？」

「死ぬって事についてですか？ 難しいことを聞きますね」

「でも、これは長い間《零崎》にいた伊織さんだからこそ、聞けると思うんです」

「人識君もいますよ？」

「いや、正直聞きづらいです」

「あ、なるほどー」

合点があつた。

伊織の反応に、でしょ？と苦笑いで返す高織。

そして、伊織は少し複雑な表情を浮かべた。少し回答に悩んでいるようだった。

考えがまとまったのだろうか、やがてその答えを紡ぎ出す。

それが何だったのか——実際のところ、高織は覚えていない。

個人的に忘れたくて忘れたか、理解できずにそのまま忘却したか

——あるいは、その事柄を無かったことにしたのか。

その真実は高織自身にも分からないだろう。間違いなく。

私は零崎高織。ただの殺人鬼だ。以前は木野花織きのかおりと名乗っていた。殺人鬼になる前はフラワーショップを営む両親と暮らしていた。しかし、そんな両親も既にいない。私が殺してしまったからだ。

そう、魔が差す——とでもいうべきか。

ある日、突然唐突に私の手に握られていた一本のナイフ。そして私の服にべつとりと強く焼きつくように塗られた真っ赤な血。

私は自首をしてしまおうかと思っていたところへやって来たのが行識だった。私の方が彼より二つ歳が上なので呼び捨てにしているというより、私は元より年下をさんとか君とか言わず、常に呼び捨てで呼んでいる。

行識は私を家賊にしてくれると言った。そして私は私以外で唯一女性の零崎に会った。

それが私の師である無桐伊織さんとの出会いだった。ついでに人識さんも。

私は数少ない女性の零崎。そして、伊織さんもまた女性の零崎。当然、女性間だけに話は盛り上がった。人識さんをよそに。

「ですよね伊織さん！」

「そうですねえ」

「なあ、俺はそこまではぶられる必要があるのか？」

「そりやありますよ人識くん」

伊織さんは笑みを浮かべ、人識さんは複雑な表情を浮かべている。

居心地が悪いのだろう。

私はそう判断した。……というよりは明らかに目つきなどが不機嫌に見えるからだ。

「で、その理由は？」

「女の子同士の話に男子が首を突っ込んだらダメですよ」

「いつ俺が首を突っ込んだ!？」

「いや、大分突っ込んでますよね人識さん。この前も料理を作ってたら邪魔してきたし」

「あれはあのままだと火事起こすからだろうが！ 火事なんて起こしたらまた家探ししなきゃならねえだろ!!」

「なるほど、すっかり失念してました」

「あんたもう少し賢かったんじゃないのか……？」

人識さんは呆れたように伊織さんを見て呟いた。

人識さんは私から見れば父親のようなものだ。出来の悪い娘を少しでも真っ当に育てようと苦労する——そんなイメージを私は持っている。

世話を焼く辺りが直に影響しているとか口に出したら間違いなくNGだろう。それは私自身も自覚している。

「でも高織さん。わたし達は家賊なんですよ」

伊織さんはいつも何があっても、そんな言葉を欠かす事はない。

家賊であり、家族。

家族であり、家賊。

それこそが零崎一賊なのだ。

私は少なくともそう感じている。

伊織は高織に自分の知る事全てを口外し、そして戦い方を教えた。とはいっても、実戦経験がそこまで多くない伊織が教えられる事など、非常に少ない。しかし、高織は決して愚痴を零さなかった。とりあえず言えたのは、高織は木や花に関する武器を所持させたという事だ。

彼女自身、そういうものを瞬時に判別できる地味に変わった才能を保持していた。花屋の子供は皆こうなのだろうか、と伊織は思ったが勿論、そんなはずがない。そこは高織が変わっているだけだ。

そして——高織もまた、自立する形で伊織と人識の元から離れた。

「なあ伊織ちゃん」

「んー、何ですか人識くん？」

「気づいてるか？」

「はい、薄々は」

「長年《零崎》だった事はあるな。つー事だ、出てこいよ」

人識の言葉に誘発され——白仮面の男、空時元雨うつとき げんうが人識と伊織の住宅内へ足を踏み込む。

「ふむ、流石に数話もブランクがあると厳しいものがあるな」

「登場早々にメタ発言！？」

「分かりますねえ。わたし、こんな口調だったか正直言って疑問ですからねえ」

「伊織ちゃんまで乗るな！ 何か恥ずかしいからマジで勘弁してく

れ!!」

さて——と空時元雨は口にし、懷から拳銃を取り出す。どこにでもありそうな黒い自動拳銃を人識に向ける。

「《零崎》に銃弾は効かねえぜ?」

「ああ。効かないだろうな。しかし、俺の銃弾は君を確実に殺すだろう」

「年老いたわたし達は取るに足らない——という事ですか?」
「そうだ」

「ここで歴史の礎となれ。零崎人識、無桐伊織」

非情な銃弾が放たれた——。

僕が人識さんと伊織さんの死を知ったのは割合死後すぐの事だった。
た。

死後すぐ、と言っても、三日後のことだ。

僕はすぐに動き出す事となった。いや、当然だった。

死亡現場を第一発見者から聞けば、抵抗の痕跡はあつたらしい。

つまり、抵抗空しく人識さんと伊織さんは殺された、という事になる。使われたのは拳銃であろう、という話も聞いた。

僕の師匠を殺し、さらには零崎に攻撃を仕掛けた。皆殺しは確定。

しかし、僕としてはこの敵を皆殺しで終わらせたくは無い。殺しの理由を僕は問いただしたい。

勿論、殺すつもりでいる。潤さんとの約束は既に破綻した。

潤さんにこの後、殺されようが——文句は無い。破ったのはこちらなのだから。

そしてすぐに僕はその犯人——空時元雨と対峙する運びとなる。

「よお」

いや、あれを対峙するといふべきなのだろうか。

空時元雨が勝手に、僕の目の前に現れた。

「あなたは？」

「俺か？ 空時元雨という。とりあえず——零崎人識と無桐伊織を殺したのはこの」

「死んでください」

そこまで言えば十分だった。

一気に距離を詰めた僕の右手に握られる刀子《無銘》^{むめい}。

その刃先が空時元雨へと伸びた。咄嗟に空時元雨もその速度に驚きつつ、その一撃を避ける。

そしてすぐに間隔を置く。大体10メートルくらいだろうか。

「ふうー危ない危ない」

「それで逃げ切ったつもりですか？」

「何？」

すぐに僕は錠開け専用鉄具銃ともう一丁、自動拳銃を取り出し撃

ち出した。

この自動拳銃は当然の如く、積雪さんに作ってもらった代物だ。特別なものはいらないので普通の拳銃がほしいという僕の要望を積雪さんは承諾し、すぐさま調達してきてくれた。

武器職人である積雪さんに悪いことをしたな、という実感はあるにはあったがとりあえず、ある程度は積雪さんが調節をし、使いやすさは抜群だ。

「くつ、油断も隙もありやしねえ」

「そりゃそうでしょう——あなたはやってはいけない事をしたんだ。正直僕の沸点は限界を超えてますよ」

「おいおい自分で自分の沸点なんざ決めてるんじゃないやねえ」

「決まりますよ」

だって——と僕は少し間を置く。

この男に僕が今、何を考えているかなどきつと分からないだろう。

「今僕はあなたを殺したくてうずうずしてるですからね！」

「くだらないな」

瞬間、冷たい感覚が全身を駆け巡る。

体から力の抜けていく感覚。僕の足元に落ち行く赤き液体。血である事はすぐに分かった。

ふと腹部に目をやれば、ナイフが僕自身の体を貫いている。

「ここで朽ちるといい。零崎行識」

「う……あ……」

体の力が抜けていき、やがて僕の体が倒れる。血が止まることは無い。

まずいな、このままだと……。空時元雨がゆつくりと近づいてくる。

動かなきゃならないのに……動けないなんて……

「零崎一賊にはここで滅んでもらおう。当然、お前もここで死んでもらう」

今の僕に何かを発するだけの気力は残っていない。精々、空時元雨を鋭く睨みつける事しかできなかった。

それしか出来ないという事実が内心悔しかったし、憎かったし、腸が煮えくり返るようだった。

僕は僕自身の非力さを恨むことしかできないのだろうか……こんな終わり方は正直勘弁してほしいもんだよ。

このまま死んでしまうのだろうか——そう思ったし、感じ取った。

「あたしの大事な大事な行識に何してくれてんだ？」

その声は半ば突然。そして唐突。不意にやって来た。

ふと目をやった僕の視界に映る赤色。そう、全身一色が赤色と言ってもおかしくはなかったし——第一赤色という色を、あそこまで目に余るようで注目を集める色を見間違えるという事はまずないと僕は思う。だって目立つもん。

そして、全身一色といえば——僕の知る限りでは一人しかいない。

「よお」

「哀川潤……人類最強か」

空時元雨は少し眉を顰めた。

潤さんの表情はかなり怒っているのが見ていて分かる。

助けに来てくれたのだろうか？ いや、そんなわけがない。

しかし、潤さんは今“大事な行識”と口にした。厳密には大事な一つ多いが、そんな事はどうでもいい。

だから僕はその答えを無性に聞きたくなった。残る力を振り絞って、声をかけた。

「潤……さん……」

「黙ってな。ここはあたしに任せておけって」

いつもは冗談を言い合ったりする仲だというのに安心感が僕の中に浸っていった。

そして、自然と瞳が閉じられていく。僕の意識はそこで途絶えた。

次に目の覚めた時、行識の体には包帯があった。

動かそうとする度に激痛が走りそうだった。

行識を診てくれた人物はかなり変わっていて白衣の下に水着という前代未聞の服装だった。勿論、行識はドン引きして脱走を試みたが、現在の体の状態からして動かせず、渋々居座っている。

「人識くんの事、残念だったね……」

そのドクターは行識の事情に多少精通しているのだろうか、怪我の具合と共にそんな言葉をかけてきた。勿論、同情といった事があるのだろう。

しかし、言い方などからして人識の知り合いである事はすぐに理解できた。しかし、人識はこの人物の事を言った事は無い。古い知り合いなのだろう。

行識は問う。

「あなたは一体何者なんですか？ 潤さんの知りあいなのは分かりますが、人識さんとはどういう……」

「えもとそのき絵本園樹。潤さんと人識くんとは狐さんとの事で出会ったの」

「狐さん？」

「うん。まあ、とりあえずその辺りはあまり詮索しないで。狐さん風に言うなら終わった事なの」

「変わってますね、その狐さん」

「まあね。人識くんが二十年近くも長生きしてたとは思わなかったけど……それ以上に全滅していた零崎一賊が再興されているっていうのも驚きだよな」

「そうですか」

「いっくんは知ってるのかな、この事……」

「いっくん？」

「人識くんとは仲のいい子だね。鏡のような感じだ、って言ったんだ以前」

「鏡……人識さんみたいな感じですか？」

「まあ、そうなるね」

会ってみたいな、と頭の中でそんな事を一瞬想像した行識である。しかし、今はこの傷を直す事が最優先だった。

哀川潤はあれから空時元雨を追っているのだという。しかし、人類最強に逃げ続ける事が出来るなど常識を逸脱している。

人間業で無いように行識は見えた。

「つつーわけだ、すまん！」

傷が治り、行識が活動を再開できるという日に哀川潤は姿を見せた。

彼女が口にした事は空時元雨を逃がした、という事だった。

「逃げられたんですか……」

寧ろ行識は感嘆としていた。

「まあ、行識。お前の頼み通り、零崎一賊の面々は一箇所に避難させておいたぜ。食糧なんざも全部OK」

「すいません。何から何まで」

「構わねえよ。で、約束は守ってくれるんだよね？」

「はい、出世払いになりますがお支払します」

「ま、全然構わないぜ。でも一つだけ誤算が起こってな」
「誤算？」

ほれ、と哀川潤が壁を軽く叩くと開かれるドア。そのドアを開けた張本人は高織であった。

「高織！？」

「行識さん……いえ、行識。私も連れて行ってほしいの」
「何で」

「私も師匠を殺された。私だって……敵をとりたい。お願い」
「駄目だ。いくらなんでも危険すぎるよ」

高織は行きたいとして決して諦める事無く言葉を紡ぎ続ける。

そして、行識は頑固として首を縦に振らない。
そこへ哀川潤が助け舟を出すように、

「高織ちゃんを同行させてくれたらあたしの依頼料、チャラにして
もいいぜ？」

「はい！？」

「ほら、女性に優しく、だろ？」

哀川潤の言葉にはあとため息をつきつつ、行識は首を縦に振った。

「まあ、僕だけでも厳しいからね。高織、頼むよ」
「勿論」

周知が一致団結した——その直後。

「そうか。ではそろそろ始めるとしようか零崎行識、零崎高織」
「「！？」」

突然響く声。いや、判別は可能だ。

空時元雨の声である。

全員がすぐさま周囲を見渡し——

「時空を超えた戦いの始まりだ」

その声と共に行識と高織の姿がその場から消失する。現場に残されたのは哀川潤と絵本園樹の二人だけだった。

行識と高織が放り出された空間は一言で言ってしまうば、気味の悪い空間であった。

辺りは白い光だけ。残る全ては黒一色。空も大地もその全てが真っ黒だった。

「どこよここ？」

「さあね、ここがどこか分ければ楽なもんだよ」

『全く仕方がないの。行識よ』

その言葉として突如現れたのは青き袴を身に着けた老人——幽霊の零である。

しかし、高織はそれを見た瞬間、目が点になったように動揺した。

「え、何……？ 錯覚？ 幻覚？」

『おっと。お前さんとは初めましてじゃな。ワシは零という』

「はあ……」

『まあ細かい事は後回しじゃ。しかし、幽霊のワシを見た瞬間に動揺するとは。意外とビビリなんじゃな』

「誰がビビリですって……」

明らかに高織の表情が怒りに満ちていた。

行識ですら本気で一步退きなくなるほど、この時の高織は恐ろしかった、と記載しておこう。

しかし、零は余裕を保ち、飄々としている。

『行識。ワシが少し働くとしよう』

「そう。じゃあ頼むよ零」

あいわかった、と零。

辺りを見渡す。行識は確かに実力だけなら着々と身に付けて伸びているが殺気というものに関してはどうしようもない。

それを補うのが零だ。彼には幽霊だけあり、特有の能力というべきものが備わっている。

それが殺気を読み取る力。

先述した闇口霊衣との戦闘で彼が彼女の居場所を探知できたのは彼女の持つ殺気を零が感知したからである。

そして、意識を集中していたのだろう——閉じていた目を開いた。

『そこじゃ』

零が一つの光の球体を指差した。

「あそこに何があるのよ？」

『よくは分らん。原理こそ不明じゃが、あの光の球体の先に空時元雨とやらはおる。そして——なぜかは分らんのはこの先じゃ。』

ワシの現実を逸脱しておる』

「現実を逸脱？ どういう事？」

『殺気と呼べるものはある。しかし、《零崎》特有の殺気が殆ど無い。得体の知れんものはなぜか感じ取れる。正直幽霊体のワシですら寒気がする』

「幽霊が寒気ってそんな非現実的なこと言わないでよ零」

「いや既に非現実的だと思うけど私」

そこで零は最も大事な事を口にする。いくつもの殺気を読み取る零だからこそ感知したこの場の真実を。

『行識、高織。ここは時空の狭間というべき空間のようじゃ』

「「時空の狭間？」」

『うむ。あやつによってワシらはどうやら時空の狭間のような空間に投げ出されたのじゃ。そしてあやつらはワシの指した先の球体——いや、時代じゃな。そこにおる』

「時空の狭間って事は連中は時を越えてるって事！？」

「……時を越える力か……」

『行識。お前さんの気持ちも分かるがまずはあやつらを何とかせねばならん。何かをしでかす前にの』

「そうだね。零、詳しいことは分かる？」

『ふむ。零崎特有の殺気は二つ。大方人識と伊織のじゃろう』

「了解。じゃあ高織は伊織さんに、僕が人識さんを探すよ」

「あまり無茶はしないでよ」

「それは僕の台詞」

そして、行識と高織は歩き出す。

球体に触れると彼らの体は時空の狭間から姿を消した。

零崎行識と零崎高織。二人の再会是目前である、とここに記す——。

（零崎行識VS空時元雨——勝者、空時元雨）

第捌日目 動き出す時（後書き）

という事で今回の話で未来の人識と伊織ちゃんにはご退場願いました。

色々ご都合主義じゃね？という箇所もあるかもしれませんが。特に零の辺り。

そして、次回からは物語を元の時間軸に戻していきます。

それではお楽しみに。

第玖日目 零崎行識VS哀川潤

哀川潤。

あの人を一言で言うなら『人類最強』につきるだろうけれど、一方で、あの人もまた人間なんだな。と僕は思う。

以前、人識さんから聞いた事がある。人識さんと潤さんが初めて遭遇した時、潤さんは十三種類目の人類だと名乗ったらしい。まあ、領けなくも無い話だと思う。

そして、その潤さんが今、僕と人識さんの目の前にいる。口元を鋭く歪ませて。顔も強張っている。完全に怒っているのは、誰が見ても明白だと僕は感じた。

「ひ・と・し・きクウーン？　どという事かなあ……？」

潤さんが、人識さんに少しずつ近づいてくる。

人識さんは僕をちらりと見る。まあ、発端は僕なんだし、お前が何とかしろよと言っているのだろう。ていうか、それ以外に考えられない。

人識さんは確かに巻き込まれた身。それでオダブツというのはそれこそ救われない……。ていうかそれ以上に僕が恨まれそうで怖い。呪い殺されそうな気もしないわけではない。

「あ、あのこれには一応ちゃんとした理由が……」

「いや理由とか聞く必要ないし。約束破ったから半殺し確定」

「半殺し！？　まだ生かすつもりかよ！！」

「だって、その方が色々都合良さそうだから」

「都合良さそうってアンタただけSっ気混じってんだよ！」

「いや、ここは傑作だぜって言うべきじゃね？」

「そうそう確かに傑作だ……。なわけあるかーッ……！！」

見ていて正直なことを言つと……面白い。

人識さんと潤さんのやり取りがここまで面白いとは思わなかったというのも事実。

つい、その笑いが漏れる。

その漏れた声によやく潤さんも僕に視線を向けて反応した。

「で、その少年は誰だよ？ 人識クン？」

「何でもかんでも俺に振るなよ！」

「だって、色々と面倒だし。それにあたしが分かるわけないだろう？」

潤さんの言葉は暴力的にも見えるけど、しかし考えてみればその通りで、正鵠を射ている。少なくとも、この時代の潤さんと僕は初対面なのだから僕のことを知らなくてもそれは仕方ない。

そもそも僕はイレギュラーな存在なのだ。この時代の人間ではない。

「えーとだな……てか自分で名乗れよ」

「振るんですか、そこ！？」

「自分の事は自分でしろ！！」

「……ちっ」

「露骨に舌打ちするんじゃない！」

人識さんの言葉をおいておき、僕は潤さんを見て言う。

「哀川潤さん、お相手願います」

「「は？」」

不意打ち——という言葉を使えばそれで済みだ。

しかし、僕は少なくとも見てみたかった。この時代の哀川潤の実

力を！

「僕の名は零崎行識……今より遠い未来から来た《零崎》の一人です！―」

その言葉と同時に僕は懐の錠開け専用鉄具銃と黒の自動拳銃を取り出し、発砲する。勿論、そんなものが潤さんに効くわけがないという事くらい、僕は把握している。

あくまで今のは挑発用だ。

しかし、潤さんは突然の攻撃であつたに関わらず、銃撃をあつさり避ける。まあそうなるのは読めていたから、何の問題も無い。

「ほお、あたしに喧嘩売るつてか？ いい度胸じゃん。いいよ、少しだけ相手してやろうじゃないか」

「その余裕、どこまで通じますかね！？」

僕はその言葉と共に潤さんとの距離を詰め、《無銘》で潤さんの首筋を狙う。喉を一閃してしまえば、それはもう即死に等しい。

流石の人類最強でも、元を返せばただの人間。基本中の基本だけは忘れてはいけない。

「甘いんだよ」

潤さんは僕の攻撃を読んでいたかのように、《無銘》の一閃をあつさり避ける。そして、カウンターと言わんばかりに拳を構え、僕へ一撃を仕掛けようとする。

しかし、そうは簡単にいかない。僕だって、伊達に殺人鬼をしているわけじゃないし、相手は何せ潤さんだ。時間操作能力を存分に生かさなければ、第一、勝負にもならない。

僕は迷わず、時間を止めた。そして、距離を置く。止めている間

に一閃すればそれでおしまいなのは分かっている。けれど、ここで潤さんを僕は殺せない。

いや、正しく言うなら——殺してはいけないんだ。ここで潤さんが死んでしまえば、後の時間軸に多大な影響が及び、僕がまずここに立っている事すら危うくなるから。

そうなれば、零崎一賊はまた、全滅状態へ逆戻りだ。

だから、僕は腹をくくった。あの武器を使う。僕の持つ、最強の武器。

そう、殺し名や呪い名が轟く、暴力の世界風に言うなら——僕の得物を使う。

僕は零に語りかけた。

「零」

『行識。いくのか？』

「うん。潤さん相手に力なんて出し惜しむ事はまず不可能だからね。こうなったら、僕も全力で行く。この得物を潤さん相手に使った事は無いからどうにもいけないけど……」

『大丈夫じゃ、問題あるまいて』

零はいつものように僕にそう言ってリラックスさせてくれる。

そして、僕は軽く深呼吸をした。正直言ってしまうと、僕の体力は二度の時間停止の影響でかなり限界に近づいている。

この能力の面倒なところは体力の消費が桁違いに著しい、という事だ。まあ、これで何のデメリットも無ければ、万々歳なんだけど……そううまくいくわけがない、という事もまた僕は理解している。

「時間再開」

僕の言葉と共に、時間はまた始まりを告げ、風が流れ出す。葉が

落ちる。

そして、潤さんの拳は空振りした。当たり前だよね、僕はそこにいないのだから。

「なっ!？」

当然、潤さんは驚いた。しかし、僕はそんな潤さんを見ながら、高々に宣言する。

なんでだろうかな、不思議と不意打ちみたいな事をするのがこの場合に限ってだけは嫌いなんだよね。人間、よく分からないことだらけだ。

そして、僕の傍らにはいつも通り、零がいる。

「潤さん。あなたには出し惜しみをする必要がなさそうだ」

「何？」

「だから——これを使わせてもらおう!」

瞬間、零の姿が変わっていく。人というものを越え、その形をみるみる変えていった。そして僕の手に握られる一本の太刀——日本刀。

そう、零の真実。それすなわち、彼はただの幽霊などではなく、僕自身の武器。

罪口商会、罪口積雪さんが作り上げた一品だ。そして、同時に意志を持つ唯一無二の武器。

「……幽霊が武器に変わった？」

「ええ、これが零の真の姿です」

驚きを隠しきれないのは潤さんだけではない。それは人識さんもまた同じだった。

「な、なんだそりゃ……反則すぎるだろ、オイ……」

「反則も何も。僕は零崎の一員です。僕はずっと色々な武器を扱いましたが、得物だとは言ってません。僕の得物はこの零ですよ」

まあ、あくまで本当に少し前に変更したんだけどね。

僕が零と出会ったのは絵元園樹さんのところで治療を受けていたときだ。積雪さんは僕の元を尋ねると、こう言った。いつも通り、淡々としたような口調で。

顔色も何一つ変えず。

「今回は色々大変だと思います」

「まあ、そうですね」

「やはりまた行かれるのですか？」

「はい」

僕のその言葉を聞き、積雪さんは一つのトランクを開いた。そのトランクはとても長細い黒色で、トランクの中に入っていたのは――そう、零だ。日本刀の状態で彼はそこにいた。

だけど、僕はそれを知らない。この時はあくまで、まだただの武器として認知していたのだから。

「これは？」

「零。私の作り上げた最新作の武器です。ある程度行識君にフィットするように作っておきました。これを差し上げます」

「そんな、ただでなんて……」

「これは私の一つの賭けでもあります」

「……はい？」

「たまたま、偶然にもたどり着いた、一つの考えを元に作り上げたこの武器は今までに無い新しい一面を持っています。使い勝手をこの

戦闘を利用して……とはいきませんが、聞かせてほしいのです」
「……分かりました」

要するにただで武器をあげるから、少しだけ実験台になってくれ、という事だった。

なかなかひどい事をするもんだ、と始めは思ってたんだけど、零と意志を交わし続けるにつれ、こういう武器も新鮮で悪くないなと思っただけだ。

最も、零は僕の得物でこそあるが、実戦経験は何一つとしてない。はつきり言ってしまうえば、ただの賭けだ。

「へえ、結構面白いじゃないの」

潤さんはいつも通りの笑顔を振りまく。当然、口元が強く歪んでいるから、傍から見れば恐ろしい表情としか思えない。

「いきます」

僕は零を持ち、そして構える。リハビリを兼ねた運動で何度か零を振るった事はあるけど、実戦で使うのは今日が最初。

だから、うまくいくか……僕にも分からない。

一気に潤さんとの距離を詰め、その手に握られた剣を振るう。潤さんは難なくその攻撃を避けるけど、僕は攻撃を止める事無く、何度も振るい続ける。

その攻撃を避け続ける潤さんは言った。しかも少し呆れたような表情で。

「いくらなんでもそりゃ素人の振り方だぜ？ ムラありすぎだつーの」

「それは失礼しましたッ！」

まあ、僕でも大振りなのはなんとなく分かる。自覚できるって事はそれほど大きい隙もまた、生まれている。

しかし、潤さんとして攻撃する隙はあると思うのに一撃を決めてこないのは――正直不思議だった。

僕はとにかく、必死に攻撃を続ける。そうやって僕はもがくしかない。

現に僕は未来の潤さんに勝てた事が一度もない。

そして、潤さんは退屈そうになのか、はたまた、この一切動こうともしない展開に苛立ったのか、突然僕の振るう零の太刀を指一本で受け止める。真剣白刃取りなんてレベルでないのはすぐに分かる。

「行識って、いったか？」

そう言う潤さんの口調は怒気を僅かではあったが、感じる事ができた。間違いない、怒ってる。

僕は息を呑み、

「……ええ」

と答える。

潤さんは僕を見つめて言った。

「力の差っていうのを理解したらどうだ？」

「理解しているつもりですよ？ これでも」

「それにしちゃ勝つ気が無かったみてえじゃねえか」

凶星だったから僕は何も言い返せない。

二十年後の――未来の哀川潤ならいざ知らず、この時代の哀川潤は僕が何者なのかを理解していない。

このまま、殺されてしまふのかなと僕はふと思った。そして潤さんは僕の沈黙を肯定と受け取り、こう口にする。

「ちつとは反省してろ」

次の瞬間、僕の意識は消えた。

「なあ、ふと思う事がある」

空時元雨はふと、呟いた。その言葉に反応し、元雨の元へ、一人の人物が近づき、

「どうしたの？」

「いや、最近……俺はふと思うんだ」
「何を？」

「俺は何かにかき回されているような気がするんだ。気のせいかな？」

そんな元雨の弱気に等しい発言を聞き、クスクスと小さな笑い声を立てると、その人物は言う。

「珍しいわね。アンタがそんな弱気な発言をするなんて」

そんな言葉を発した者はガラスコップに水を注ぎ、そのコップを

元雨に手渡す。元雨もそれを拒むことなく、受け取った。

「で、だ。お前はとうなんだ？ 花濃^{かの}？」

花濃^{かの}と呼ばれた者はどこか寂しげな表情を浮かべ、元雨にこう返す。

「そんなの、怖いに決まってるでしょ。生死と隣り合わせなんだから」

「……そうだな」

元雨はその言葉にどこか納得したような様子で呟いた。

（零崎行識VS哀川潤——勝者、哀川潤）

第玖日目 零崎行識VS哀川潤（後書き）

さて、今回の話では行識と潤さんに戦闘していただきました。
そして、新キャラ・・・とはいいませんが、これまで数話にわたって登場してきた空時元雨の仲間の一人が花濃という名前である事の発覚。

哀川潤編、と位置づけているこの章ですが、本格的なやり取りは次回以降に持ち越しですねw
それでは次回もお楽しみに。

第拾日目 挑戦状

「やっと出会えたな」

「『やっと出会えたな』。ふん。俺はお前を知らんが」

「知らなくて結構」

「『知らなくて結構』。ふん。では聞かせてもらおうか、お前の名を」

「空時元雨だ……ああ、そちらは名乗る必要は無い。知っているかな、《人類最悪》——さいとうたかし西東天」

「俺はそこまで有名になったか？ それ以上に——この面を被っていないがらにして俺を俺だと認識するためには最低限一回は遭っている必要があるだろう」

「細かい理屈は抜きにしてくれ。説明がややこしい」

「ふん。そんなことはどちらでも同じこと……という事が」

「そついう事だよ」

僕が目を覚ますと、視界にコンクリート状の壁が映る。

……ていうか生きてるんだ、僕。……いや、これは夢なのかな？

「よお、未来の零崎クン」

そんな言葉を聞こえた。少なくとも、こんな感じで言う人はあの
人しかいないだろう。そう、人類最強である——哀川潤くらいでな
いと。

僕が視線を声の方向——窓へ向けると、パイプ椅子に座る潤さん
がそこにいた。それだけじゃない。

「……やっほー、行識」

「やっと起きたのかよ」

「高織に……人識さん？」

目を疑った。いや、人識さんなら納得はいく。驚いたのは高織の
登場だ。

それに——もう一人、ニット帽を身に着けた女の人がいる。とい
う事は……

「零崎舞織さん……ですか？」

「そうですよ。本名は知ってますよね？」

「はい、無桐伊織さんですよね」

それくらいは覚えている。師匠の相方とも言うべき人だったんだ
から。

しかし、気づいてみればここには零崎一賊が四人。そして人類最
強。

……はつきり言って最強パーティーじゃないか。

「行識くん。事情は色々聞かせてもらった。まさか未来から零崎一
賊を滅ぼそうとする輩が出てくるなんて、あたしの想定外だよ」

「普通なら想定できませんって」

僕は苦笑しながら言った。そういえば零はどこへ行ったのだろうか。破壊されていないといいんだけど。

それを察したのか、潤さんが――

「お前の武器ならあたしがちょっと預かってる。かなり変わってる武器だったよなあ。おかげで色々と聞けたけど」

「あなたは何を零から聞きだしたんですか!？」

正直マジで不安だ……。

零、ああみえて結構僕のことになると口軽かったりするし、変な勘違いをもらしていないといいんだけど。

「いやー、幽霊にも貞操の心配する奴いたんだなーって驚いた」

「あなたは本当に何をしかけたんだ!？」

ちょっと後で零から事情聴取しよう。うん、確定。ていうか少なくともそれをしないと怖すぎる。

「まあとにかく、これで全員集合できたわけ」

と、高織が言った。確かにそうだ。

これで最初の目的は達せたわけで、空時元雨がどれほどの勢力を持っているかは知らないけれど――それでも、かなりこちらに分がある事は間違いないと思う。

何せ、こちらには人類最強の請負人――哀川潤がいるのだから。そんなわけで少しだけ浮かれていたその空気に――入り込む扉のノック音。

僕は回診なのかと思いつつ、はいと適当に答えた。しかし、中へ入ってきたのは全く別の人物。

「よお、元気そうだなにより」
「空時元雨!？」

そう、なんと空時元雨が敵陣へ一人、飛び込んできたのだ。
しかも、会釈を軽めにして。

どういつ了見が分かつているのだろうか。正直、気が知れないというよりは——理解不能だった。

しかし、咄嗟に僕と高織は構える。空時元雨はそれを見て含み笑いをする。

「何がおかしい？」

潤さんが空時元雨へ問う。どこことなく、苛立っているような感じだ。

何が原因なのかは全く分からない。

「おかしい? いやいや、そんな事は無いよ。『人類最強』」

「なら、なんでわざわざこんなところ来たんだ？」

「今頃なら零崎行識が目を覚ましているだろうな、と推測したまでさ。哀川潤と戦闘^{バトル}することくらいなら読めるからな」

「なるほどね」

「納得していただけたようで光栄だ」

「それで全部説明したつもりか？」

そう告げたのは人識さんだ。伊織さんも人識さんもかなり警戒している。

それもそうだ、一賊を滅ぼすと言っていて、それを知っているのに警戒しないわけにはいかない。

ましてや、その張本人が目の前にいるというのに。

「零崎人識に無桐伊織……か。まあいいさ。今日は何もここで戦争をしようなどという事を言いに来たわけではない」

「なら何の用なんですか？ あなたのような人が何も考えずに来るとは到底考えられませんよ？」

と、伊織さん。確かにそれは正鵠を射ている。

そして、空時元雨も理解しているようで仮面の下からククク、と笑い声が漏れた。

「ああ、そうだな。では単刀直入に言おう。俺は挑戦状をお前達五人に突きつけさせてもらう」

「ちょ、五人って最強まで入れるつもりかあんだ！？」

「そうだが？」

「……マジで笑えねえよ。傑作なんてもんじゃねえ」

人識さんがブツブツ独り言を口に出す。正直、潤さんとチームを組むのがそこまで嫌なのだろうか？

……まあ、あの潤さんだからなあと僕は納得もしてしまう。だってあの潤さんだもん。

「三日後、澄百合学園跡地で待つ。なあに、どうせまだ取り壊していない終わった場所だ。——使える限りは使わせてもらうとするよ」

そんな言葉と共に空時元雨は僕らに向けて背を向けた。

そして、空時元雨は一人呟くように言う。

「ククク……ようやくあいつの実力を見る事ができるよ……」

それはどこか——まるで空時元雨はこの決戦を待ち侘びているかのようなそんな口ぶりをしていた。

「お帰り。どうだった？」

空時元雨の帰還と同時にいつも通り、水の入ったコップを渡す花濃。

空時元雨はその水を一気に飲み干すと、コップを花濃に返す。

「どうだったかと言われたところで殺気を向けられまくったに決まっているだろう」

「そうね。あんたから殺気の痕が感じられるもん」

「全く。血の気の多い連中だよ」

「血の気が多い……ね。そういうえば、肝心のあつちは？」

「ん？ 《人類最悪》か？ どうだろうな……あつちもあつちで分からん。どいつもこいつも理解不能だ」

そんな事を言う空時元雨はどこか困ったような表情を浮かべる。
心底、うんざりしているかのようでもあった。

——そんな時。

「おい、宣戦布告はしてきたのか？」

空時元雨でもなく、花濃でもなく、ましてや闇口霊衣でもない声の持ち主。

その言葉を聞き、空時元雨は黙ったグーサインを出した。成功の証である。

「そっか、やっとなんだな」

「ああ、やっとだよ」

「という事は動くのね、元雨」

「そういう事だ」

行くぞ——その言葉と一緒に彼らは隠れ^{アシト}処を放棄する。目指す先は何処なのか。

しかし、分かる事がただ一つある。

歯車は一気に回転を早めていく——ただ、それだけだ。

（対戦なし——勝者、なし）

第拾日目 挑戦状（後書き）

という事で軽め軽めではありますが、西東天さんにもご登場していただきました。

個人的に戯言シリーズで大好きなキャラの一人です。

早く天さんを本格的に登場させたいですwww

第拾壹日目 ただの幕間じゃないよフラグというんだ（前書き）

祝！ 偽物語アニメ化！！

ニコフアーレでそれ知った瞬間、テンションが異常にアゲアゲになりました！

・・・その30分後、転寝してましたがね^^；

第拾壹日目　ただの幕間じゃないよフラグというんだ

「十全ですわ、お友達」
ディアフレンド

と、口にしたのは潤さんが呼びつけた僕の戦闘力面強化を目的とした人物。

言うなれば――師匠、と言うべきだ。

石丸小唄。

七本槍や大泥棒などと呼ばれ、同時に潤さんのライバルだという。噂だけは聞いた事があったのだけど、こうして面を会わせるのは初めてだ。

「それで？　いつこの子供をお返しすればよいのですか？」

「移動時間を踏まえると今日一日だけだ。明日の昼までには返しに来てくれ。それまでは何させても構わないから」

と、小唄さんに返すのは潤さんだ。

ていうか、何させても構わないって……何かするに当たって僕の意見などは全て無視ですか。

小唄さんも潤さんの言葉に首を縦に振ると、

「十全ですわ。では早速借りるとします。あ、早々」

「んだよ？」

「生きて帰れる保証ありませんわよ。死体でお返ししても？」

「ん？　死体でも返してくれるんだ」

「縁起でもないこと止めてくださいよ！」

気付けば。

大声で僕は二人にそう言っていた。

「……まあそれは冗談として。実際に生きて帰れるかは貴方次第ですわよ、お友達」
ディアフレンド

「僕次第……ですか？」

「ええ。こうして無駄口を叩いては時間の無駄ですわね。早速向か

うとしましょう」

「じゃ、よろしく頼むわ」

「十全ですわ、お友達」
ディアフレンド

*

そして、場所は変わって小唄さんのヘリコプター。

と、言うのもなんだけど、空時元雨との遭遇後、潤さんは一気に電話をかけ始めた。

何人ではなく、何十人単位で。

そして、二時間後にはさっきのシーンになっていた、というわけである。

突拍子過ぎてワケが分からなかった。

「ところで、お名前をまだ聞いてませんでしたわね」

「そうですね、小唄さん」

「既に私の名前を知っている辺りは未来から来た、という哀川潤の情報は正しいようですね」

「まあ、細かい説明は置いておくとして、僕は零崎行識といえます」

「細かい説明はこの移動中にしてもらいますわ」

と、小唄さん。

どこか不機嫌そうだが、何か癢に触る事でも僕は言っただろうか？

「助手をくれてやる、と言っておきながら実際には一日限定、おまけに強化しろなどとは理不尽にも程がありますわ」

確かにそうだ。

ていうか潤さん、どんな説明で小唄さんを納得させたんだ……。

「そういえばなんですけど」

「どうしました、お友達」
ディアフレンド

「今、どこへ向かっているんですか？」

「大厄島ですわ」

「大厄島？」

聞いた事もない地名だ。

……大厄島？

あれ、ちよつと待つて。確か以前、人識さんと伊織さんが闇口の拠点に行った事があるって言うていたような……。

すつげえ、嫌な予感がしてきた。

「……小唄さん。もしかしてですけど大厄島って」

「闇口の拠点の一つですわ、ディアフレンドお友達」

「やっぱりかああああああ！！！」

あの時の僕次第って意味がよく分かる！

ていうか殺されちゃうでしょ、これ確実に！

よりもよつて闇口に自分から殴りこみに行くようなものじゃないか！

「補足ですけど、とりあえず入って即殺されるという事態にはありませんわ」

え？

小唄さんが面倒くさそうに続ける。

「あそこの長と直接交渉に哀川潤が成功したのです。特訓に付き合ってくれるそうですわ」

「潤さんすげー……」

「厳密には、人類最強と生涯無敗の直接対決を申し込むついでにしたそうですけど」

「ついでって……」

ついででそんなことしてほしくない。

ていうか人類最強と生涯無は……え？ 生涯無敗って今言わなかった？

「小唄さん、さっき生涯無敗って口にしませんでした？」

「しましたわ。生涯無敗の《結晶皇帝》、クリスタルカイザー六何我樹丸りっかがじゅまる。大厄島で貴

方を待つ一人ですわよ、ディアフレンドお友達」

……六何我樹丸。聞いた事だけはある。

大厄島騒動の時にいた一人で、爺さんと人識さんは口に使っていた。

闇口の人間に稽古をつけてもらえる辺り、この我樹丸という人物の強さが伺える。

実力は分らないけど、それでも。

大厄島を舞台に、地獄の特訓が始まるという現実だけは避けようが無かった。

「ところで、高織はどうするって言っていました？」

「高織？ 例の連れですか？」

「そうですけど」

「何でも、自分が稽古をつけると哀川潤が口にしてましたわ」

「……高織。生きて再会できるかなあ」

ふと、そんな不安が通り過ぎていった。

だって、相手がああ潤さんだもん。

第拾壹日目 ただの幕間じゃないよフラグというんだ（後書き）

タイトルで遊びました。

特に意味は無いです。すいません。

偽物語も楽しみですが、傷も楽しみ。そして鬼物語も楽しみ。
楽しみしか増えません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1874s/>

零崎行識の人間旅行

2011年9月20日17時44分発行